

南アジアにおける動物土偶に関する覚書
—岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて—

上 杉 彰 紀

Notes on Terracotta Animal Figurines in South Asia
with an Introduction of the Collection in Okayama Orient Museum

Akinori UESUGI

南アジアにおける動物土偶に関する覚書 —岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて— 上 杉 彰 紀*

Notes on Terracotta Animal Figurines in South Asia with an Introduction of the Collection in Okayama Orient Museum Akinori UESUGI*

In this paper, temporal and spatial variations of terracotta animal figurines from the pre-Indus through Mature Indus to the post-Indus periods are discussed with descriptions of collection of Okayama Orient Museum. Whereas in Balochistan and the Indus plains during these periods, the humped bull is the most popular and dominant animal which is modelled in the form of clay models, various animal figurines make their appearance only in Sindh and western Punjab during the Mature Indus period. In Balochistan, the preference towards the humped bull continues into the Mature Indus period, making a strong tradition of humped bull figurines in this region, as attested by the collection of Okayama Orient Museum. These facts suggest that the terracotta animal figurines should be considered not as a simple and unsophisticated plastic art but as a socio-cultural object reflecting various contexts in given period and region.

1 はじめに

本稿では、岡山市立オリエント美術館（以下、オリエント美術館）に所蔵される動物土偶について報告するとともに、その評価を目的として先インダス文明期からインダス文明期における動物土偶の変遷を考察する。

南アジアでは先史時代から歴史時代にいたるまで、粘土による造形活動が盛んに行なわれてきた。その一つが土偶であり、人をかたどったもの、神を具象化したもの、そして動物を表現したものがある。時代と地域によって形態的・技術的特徴は多様である。手で粘土をこねて手足をひねり出しただけのものから、さまざまな部品を貼りつけて立体的な造

形とするもの、さらには型を用いてきわめて精緻な細部の表現を実現しているものまである。一言で土偶といってもその実態は著しく多様であり、その社会・文化的機能および意味もまた多様であったと想定できる。

土偶を取り上げて幼児の玩具とする見解があるが（Marshall 1931; De Cardi 1970）、それは土偶のもつ造形的・機能的多様性を無視した議論である。簡素なつくりであることをもって機能・意味的重要性がないと即断するのは危険で、その当時の社会の様態や使用・廃棄のコンテクストを吟味した上で何らかの判断を下す必要がある（Ardeleanu-Jansen 2002）。

一方、土偶の社会・文化的機能や意味は土偶の造形そのものにも反映されている可能性

* 総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature

が高い。製作者もしくは使用者が何を粘土によって表現しようとしたのか、それが造形行為によって実体化されるのであり、必然的に土偶にも彼らの意図が投影されることになる。土偶に付与されていた実体的意味を明らかにすることは文献史料のない時代では不可能であるが、形態、技術、使用・廃棄のコンテキストを総合的に検討し、時代と地域を越えてさまざまな土偶様式を比較することで、相対的に土偶のもつ機能や意味にアプローチすることは可能であろう。

2 オリエント美術館所蔵資料の紹介

本章ではここオリエント美術館に所蔵される動物土偶 18 点について紹介する。

全体の大きさおよび胴部が中空か中実かの違いに着目して、ここでは大形中空土偶と小形中実土偶に大別して紹介することとする。また、含まれる動物の種類はコブウシが 16 点、チーターと推定されるネコ科動物 1 点、鳥 1 点である。

なお、以下個別にみていくように、多くの所蔵品で補修が加えられている。また、補修後に彩文を施し、砂粒を固着させるなど、オリジナルにみせようとする工夫もなされている。一見して補修と判断できる場合もあるが、その一方で補修かどうかの判断が肉眼では難しい場合もある。また、補修が加えられていることが明らかであっても、補修部位を厳密に判断することが困難な例もある。筆者の観察で補修と判断した部分は実測図中で網をかけて示している。

(1) 大形中空土偶

- 1 コブウシ形土偶 (オリエント美術館管理番号：製 135-2723 (以下同様)) (図 1)
 法量：全長 15.25cm、全高 8.55cm
 色調：灰白 2.5YR 8/2 (スリップ)、黒褐 7.5YR 3/1 (彩文)

胴部に大きく欠落した部分があり、そこに粘土を充填して補修が行なわれている。また、右前肢は石膏による補修である。さらに、左角は新規に粘土でつくった角を接合している。左角先端および右目にも補修痕を残す。

胴部は中空の円筒によって構成され、下半身側は粘土板によって、上半身側は頭部を構成する粘土によって閉塞する。臀部には粘土紐を貼りつけて尾を表現する。コブは円筒の上部にさらに粘土を付加してつくられており、若干後方に突出する。また、コブの右側面には直径 1.2cm の穿孔が彩文施文後に施されている。四肢もまた円筒側面に粘土を付加してつくる。正面からみると、2・3に比較して細身で、四肢も長いという違いがある。

頭部の左右には前方に向かって彎曲しつつ伸びる角をつくる。顔は鼻先・口を円柱状の突出によってつくり、眼を円環と円点の彩文によって表現する。眼の上部には左右 1 条ずつ弧線を描き、額には逆三角形文を表現する。また、顎から両前肢の間にかけて明確な稜をつくり、鬣を表現している。角には平行線文を描き、首にも 1 条の彩線がめぐらされている。コブの側面から前肢側面には横位短線が多段に配され、同様の彩文は後肢側面にも施されている。コブの上面には首の付根から先端にかけてイトスギ形の文様を描く。このイトスギ形文の中心軸は胴部上面中央から尾の先にまで伸び、胴部中位にはそれに直交するかたちで 8 条の平行線が描かれている。

彩文に先行して白色系のスリップが全面に薄膜を形成して塗布されており、一部では膜状に剥落している状況がみられる。

- 2 コブウシ形土偶 (製 136-2724) (図 1)
 法量：全長 12.8cm、全高 9.6cm
 色調：灰白 10YR 8/2 (スリップ)、褐灰 7.5YR 4/1 (彩文)

上半身に接合痕がみられ、また右角の先端を欠損するが、ほぼ完形資料である。

鼓形を呈する円筒状中空の胴部に短い四肢

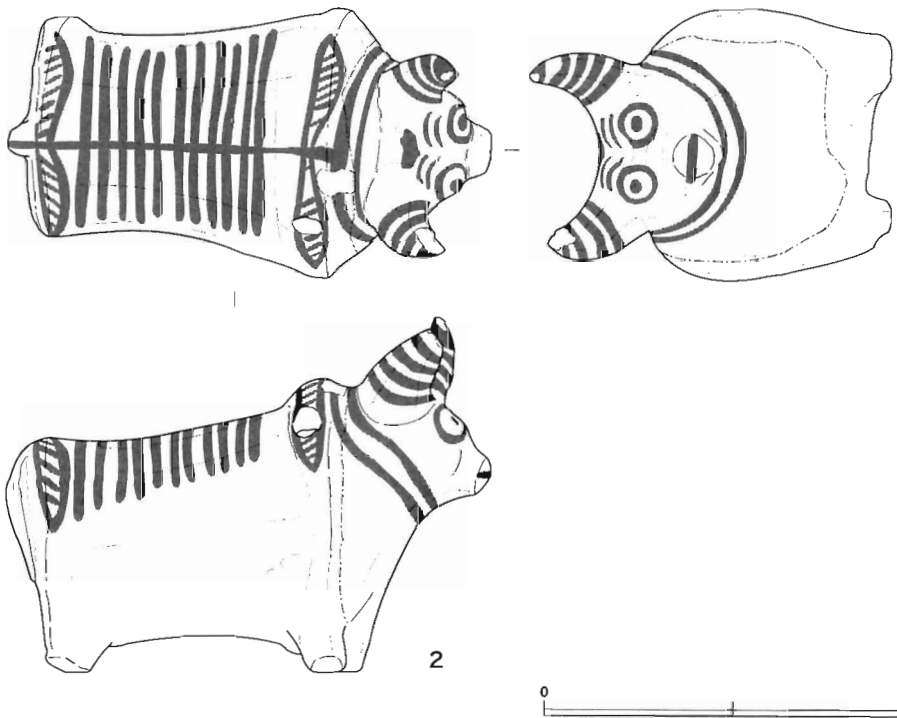


図1 オリエント美術館所蔵動物土偶実測図1 (S=1/2)

をもつ。臀部は胴部の円筒の一方に粘土板を貼りつけて閉塞したのち、平坦に仕上げられている。その中央に細い粘土紐を垂直に貼りつけて尾の表現とする。上半身側ではコブに相当する部分に胴部円筒の前端部があり、頭部を構成する粘土によって閉塞している。コブの右側面には直径0.9cmの穿孔がある。

コブは低く、コブの側面から前肢の側面にかけて円筒端部を示す稜が伸びている。頭部の左右には短い角をつくり、顔には短く円柱状に突き出す鼻先・口と、丸く隆起させ彩文で円環および円点を描いた眼を表現する。円柱部の前面平坦面には横位の線が描かれており、口の表現とする。顔には短い弧線が2本1組で2段に描かれ、その上部に逆三角形文が配されている。角には平行線をめぐらす。また、首にも2条の線がめぐらされる。

コブの側面には柳葉状の区画が描かれ、内部に斜位平行線を充填する。同様の文様は下半身側の円筒端部付近にも描かれている。背中には中央に1条の直線が引かれ、それに直交するようにして11条の平行線が描かれる。

彩文に先行して白色系のスリップが全面に施されている。

3 コブウシ形土偶 (製 139-2727) (図2)
 法量：全長 12.9cm、全高 8.7cm
 色調：灰白 10YR 8/2 ～ にぶい橙 2.5YR 6/4 (スリップ)、暗灰 N3/ (彩文)

左右の角の一部に補修痕が認められるものの、ほぼ完形の資料である。

1・2同様に、胴部は中空の円筒によって構成され、下半身側は粘土板によって、上半身側は頭部を構成する粘土によって閉塞されている。臀部には粘土紐を貼りつけて尾を表現する。コブは円筒上面に若干粘土を付加して成形されている。コブ右側には直径1.1cmの穿孔が施される。頭部左右に斜め前方に伸びる角をつくる。頭部の隆起は他例に比較すると低く、下半に低い円柱状の突起をつくって鼻先・口を表現し、上半に円環と円点の彩

文によって眼を表す。眼の上部には2条1組の弧線が2段に描かれ、顔には逆三角形文が配されている。角には平行線が描かれ、首には上面側で1条、側面から下面側で2条の彩線がめぐらされている。

前肢側面からコブ上面にかけては横位短線が列状に表されている。同様の彩文は後肢側面から胴部後端上面にもみられる。

胴部上面には首の付根から尾の先にかけて1条の直線が引かれ、胴部にはそれに直交するようにして右側12条、左側で11条の平行線が描かれている。ただし、随所で彩文はかすれている。彩文に先行して白色系のスリップが全面に薄く塗布されている。

4 ネコ科動物土偶 (製 137-2725) (図2)
 法量：全長 15.4cm、全高 8.3cm
 色調：灰白 2.5Y 8/2 (スリップ?)、黒褐 7.5YR 3/1 (彩文)

首の周りに一部補修痕が認められるものの、完形の資料である。以下に述べる特徴からチーターを象った可能性が推定される。

胴部を構成する中空の円筒を、下半身側では粘土板によって、上半身側では頭部を構成する粘土によって閉塞し、四肢を粘土付加によって成形する。右肩に相当する位置に直径1.2cmの穿孔が施されている。尾は粘土紐貼付によってつくられ、下端を上方へ跳ね上げている。

頭部についてみると、粘土紐を首に巻き付けて首輪の表現とする。頭部は左右側面に粘土板の貼付による耳を表現し、顔には下方に向かって突き出す鼻先・口の表現と、円環と円点の彩文によって眼をあらわす。眼の上側には2本1組の弧線が配される。顔から後頭部にかけては、横位直線による区画の内部に縦位鋸歯文を充填する。獣毛の表現であろうか。首輪にも1条の彩線と短線を組み合わせた彩文を施す。

胴部上面中央には首の付根から尾の先に向かって直線を描き、その左右から胴部側面に

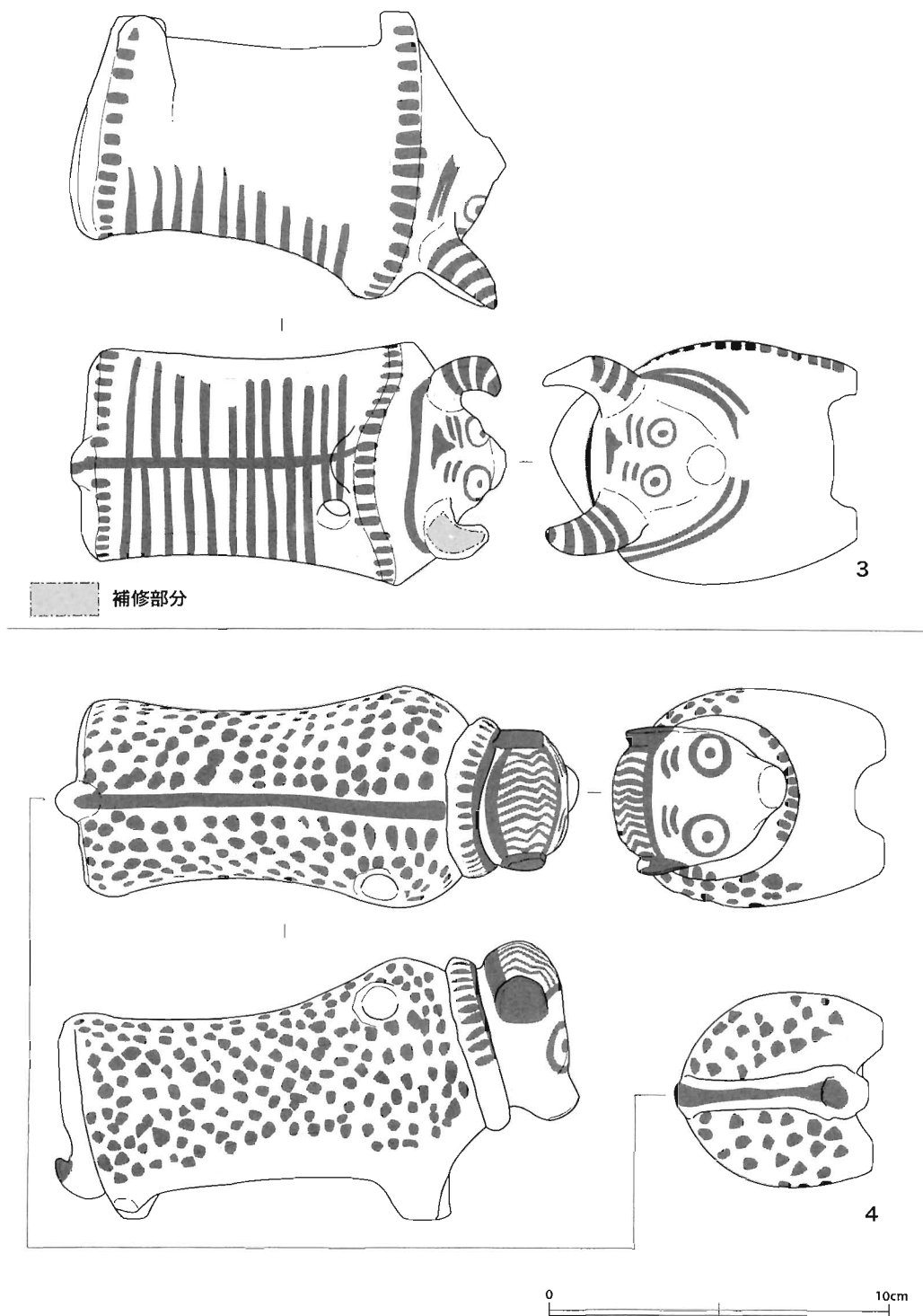


図2 オリент美術館所蔵動物土偶実測図2 (S=1/2)

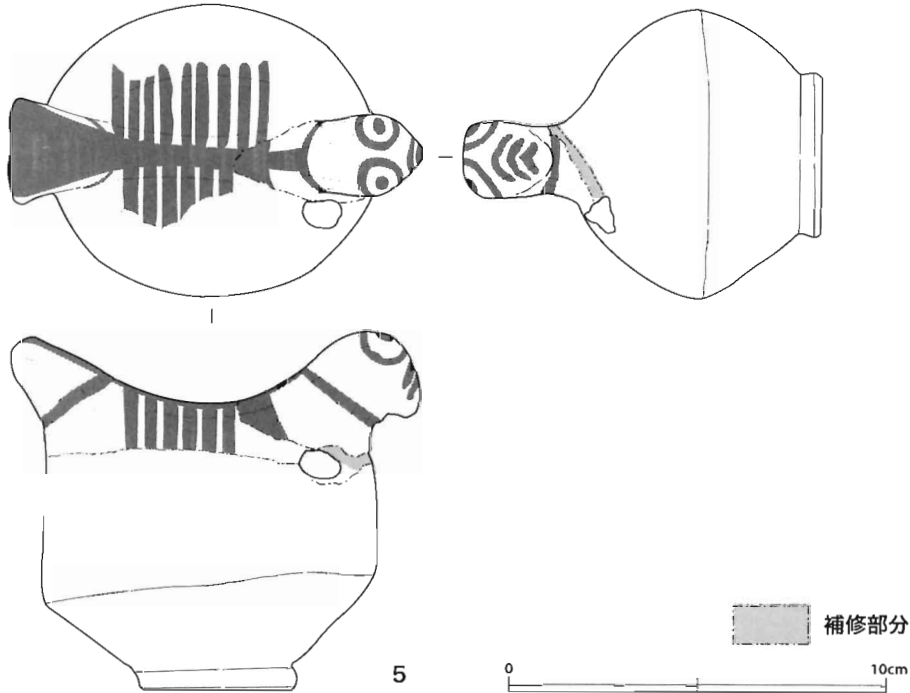


図3 オリエント美術館所蔵動物土偶実測図3 (S=1/2)

かけて多数の点文を配する。

彩文に先行して白色系のスリップが全面に薄く塗布されている。

5 鳥形土偶（製 138-2726）（図3）

法量：全長 10.9cm、全高 9.5cm

色調：にぶい橙 7.5YR 7/4 ~ 橙 5YR 6/6（スリップ）、黒褐 7.5YR 3/1（彩文）

本来別個体に属する頭部と胴部が接合された資料であるが、頭部・胴部ともに鳥を象ったものである。いずれの部分にも彩文が施されているが、当然のことながら文様は一致しない。

まず、胴部についてみると、高速回転ロクロ上で成形された下半部に屈曲をつくって上半部の粘土を付加して全体を成形する。尾はさらに粘土を付加して成形されている。右前部に直径 1.0cm の穿孔が施されている。なお、底部は自立可能な平底で回転糸切痕をかすかに残す。尾の上面は広く三角形に塗彩され、その前端に接続して胴部上面中央に直線

が伸びている。この中央軸線の左右に直交して平行線が描かれているが、右側面では土の付着によって明瞭ではない。一方左側では9条が確認できる。

頭部は斜め下方に向かってくちばしが突出し、頭頂部は丸く成形されている。正面上半左右に円環と円点の組み合わせによる眼の表現があり、下半には逆V字状の彩線が3段に配されている。首の周りにも1条の彩線がめぐらされ、上面では後方に向かって直線が伸びる。さらにこの中央軸線に直交するかたちで描かれた彩文の一部が残る。

彩文に先行して全面に白色系のスリップが薄く塗布されている。

B 小形中実土偶

6 コブウシ形土偶（製 164-2760）（図4）

法量：全長 9.9cm、全高 8.7cm

色調：にぶい橙 7.5YR 7/3（地）、暗赤灰 10R 3/1（彩文）

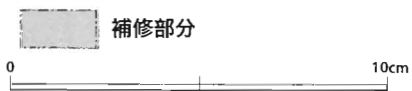
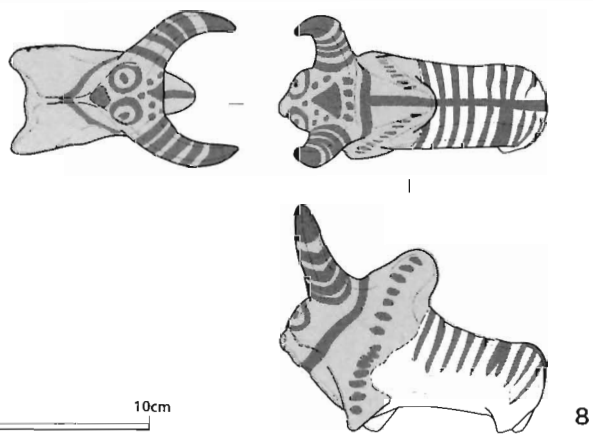


図4 オリент美術館所蔵動物土偶実測図4 (S=1/2)

左角を欠損するものの、ほかは良好に遺存する。

短い四肢と、背中頭部寄りにコブ、頭部左右に大きく彎曲する角をもつ。顔は細く突き出す鼻先と、丸く隆起させ彩文で円環および円点を描いた眼を表現する。角には彩文で平行線文をめぐらす。また、首にも1条の線文をめぐらし、胴部にも1条ないしは2条の平行線文を描く。尾は薄い粘土紐を垂直方向に貼りつけて表現する。本例では彩文はいずれもオリジナルと考えられる。

他例と比較すると、コブが前方に偏る点や胴部の平行線文の配置などに差異が認められる。

7 コブウシ形土偶(製 166-2762)(図4)

法量：全長 8.2cm、全高 5.3cm

色調：にぶい黄橙 10YR 7/2 (スリップ)、暗灰 N3/ (彩文)

四肢に補修痕が認められ、特に左前肢と左後肢は欠損したところを石膏で補修している。

細く伸びる円柱状の胴部に逆円錐形の短い四肢を有し、背中には後方に突き出るようにしてコブがつくられている。尾は細い粘土紐を貼りつけて表現する。角は短く太い。顔は鼻先を短く突き出させ、丸く隆起させ彩文で円環および円点を描いた眼を表現する。額にはT字状に線文を描く。また、鼻先も上半分が塗彩されている。鼻先から前肢の間にかけて稜をつくりだして鬘を表現する。角には平行線を、首には1条の線文をめぐらす。コブの側面から前肢側面には横位短線を多段に描く。背中には首の付根から尾の先にかけて1条の直線を引き、それに直交させてコブの直後から後肢にかけて7条の平行線を描く。また、尾の左右にも1条ずつの垂直線が描かれている。

彩文は白色がかかったスリップを塗布したのちに描かれており、いずれもオリジナルと考えられる。

8 コブウシ形土偶(製 169-2765)(図4)

法量：全長 7.1cm、全高 6.1cm

色調：にぶい黄橙 10YR 7/3 (スリップ)、褐灰 10YR 4/1 ~ 黒褐 10YR 3/1 (彩文)

胴部にオリジナルの部分を残すが、コブより前の上半身および前肢は石膏による復元と判断される。すなわち、確実にオリジナルと判断できるのは下半身のみである。彩文も補修部分とオリジナルと判断される部分で色調が異なっている。

円柱状の胴部に逆円錐形の短い四肢を有する。尾は細い粘土紐を貼りつけて表現する。背中には首の付根から尾の先にかけて1条の直線を引き、それに直交させるかたちでコブの直後から後肢にかけて右側で9条、左側で10条の平行線を描く。

彩文に先行して白色がかかったスリップを塗布している可能性が高い。

9 コブウシ形土偶(製 165-2761)(図5)

法量：全長 8.5cm、全高 5.4cm

色調：にぶい橙 7.5YR 7/3、黒褐 7.5YR 3/1 (彩文)

本来両角を欠損していたが、別途製作した角を接着剤によって接合している。本来は他例同様に彎曲して伸びる角を有していたと考えられる。また、四肢の先端を欠損する。口・鼻の部分にも補修が加えられている。

円柱状の胴部に逆円錐形の短い四肢を有し、背中には後方に向かって突き出すコブをつくる。尾は細い粘土紐を垂直方向に貼りつけて表現する。顔は短く突き出す鼻先と、丸く隆起させ彩文で円環および円点を描いた眼を表現する。角を貼りつけた際の接着剤のために判然としないが、額には逆三角形文を描いているようである。鼻先から前肢の間にかけて稜をつくりだして鬘を表現する。

背中には首の付根から尾の先にかけて1条の直線を引き、それに直交させてコブの直後から後肢にかけて右側面で11条ないし12条、左側面で13条の平行線を描く。また、

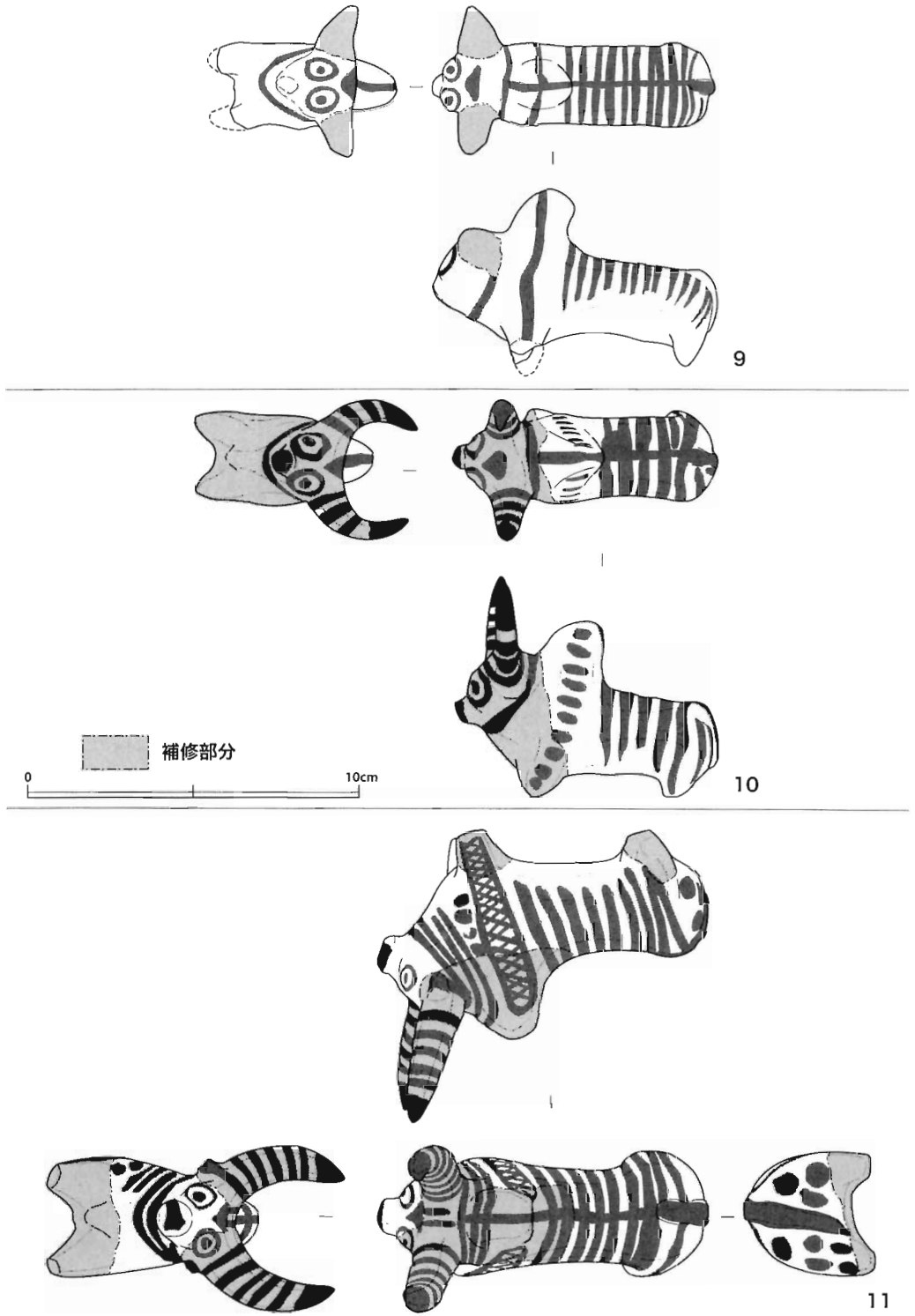


図5 オリент美術館所蔵動物土偶実測図5 (S=1/2)

コブから前肢の側面にかけて1条の線が描かれている。

彩文に先行して白色スリップを塗布する。

10 コブウシ形土偶(製 168-2764)(図6)

法量：全長 8.0cm、全高 6.7cm

色調：にぶい黄橙 10YR 7/2 ～にぶい黄橙 10YR 6/3 (スリップ)、暗灰 N3/～灰褐 7.5YR 4/2 (彩文)

一見、完形にみえる資料であるが、胴部下半身と胴部上半身および頭部で表面の雰囲気異なるとともに、彩文の色調が明瞭に相違しているところからみて、胴部上半身および頭部は石膏で復元し、彩色・彩文を施している可能性が高い。また、四肢も左後肢を除いて石膏による補修が加えられている。

円柱状の胴部に逆円錐形の短い四肢を有する。背中にはやや後方に突き出すコブをつくる。コブから前肢の側面には横位短線を多段に配する。背中には首の付根から尾の先にかけて1条の線を引き、それに直交させてコブの直後から後肢にかけて6条の平行線を描く。また、尾の左右にも1条ずつの垂直線が加えられている。

彩文に先行して白色系のスリップが全面に塗布されている。

11 コブウシ形土偶(製 170-2766)(図5)

法量：全長 10.0cm、全高 9.0cm

色調：にぶい黄橙 10YR 7/2 (スリップ)、褐灰 10YR 4/1～黒褐 10YR 3/1 (彩文)

非常に巧妙に補修・復元されているが、四肢、コブ、角、顔の一部は石膏による補修である。彩文もオリジナル部分と補修部分で色調が異なっている。

中位で緩やかにくびれる胴部をもつ。尾は先細りの粘土紐を左に振るようにつけて表現している。顔は明瞭に突き出す鼻先と、丸く隆起させ彩文で円環および円点を描いた眼を表現する。額には逆三角形文と後頭部に向かって伸びる2条の平行線を描く。鼻先から前肢の間にかけて低い稜をつくりだす。顔

の左右の角の下には突起によって耳が表現されているが、オリジナルではない。コブから前肢の側面には上端を丸くした縦長の区画を描き、内部に斜格子文を充填する。右側ではこの縦長区画彩文と首の平行線文との間に4個ないし5個の円点文を配する。背中には首の付根から尾の先にかけて1条の直線を引き、それに直交させてコブの直後から後肢にかけて9条の平行線を描く。臀部から後肢後面には円点文を配する。

彩文に先行して白色がかかったスリップが全面に塗布されている。

12 コブウシ形土偶(製 167-2763)(図6)

法量：全長 9.2cm、全高 7.2cm

色調：にぶい黄橙 10YR 7/4 (スリップ)、暗赤褐 2.5YR 2/3 (彩文)

この資料に関しても一見完形資料のようにみえるが、四肢およびコブは補修により、頭部は石膏による補修と判断できる。少なくとも胴部はオリジナルの可能性を残す。

遺存部に関して細部の特徴について述べておくと、円柱状の胴部に逆円錐形の四肢をもち、背中には丸く隆起するコブをつくる。コブから前肢の側面には柳葉状の細い区画内に斜位平行線を充填する。左前肢を除く左側面はオリジナルの可能性があるが、右側面は石膏で補修した上から彩文が施されている可能性がある。背中には首の付根から尾にかけて1条の直線が引かれ、それに直交させて胴部中位に5条の平行線を描く。

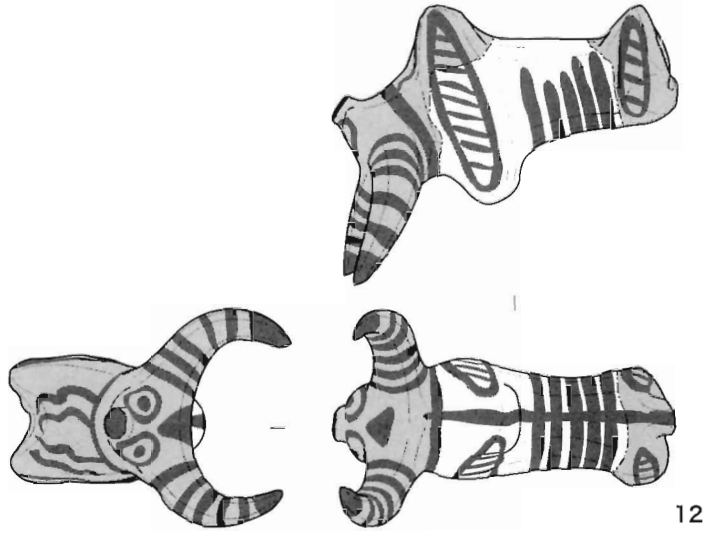
彩文に先行して白色系のスリップが全面に塗布されている。

13 コブウシ形土偶(製 140-2728)(図8)

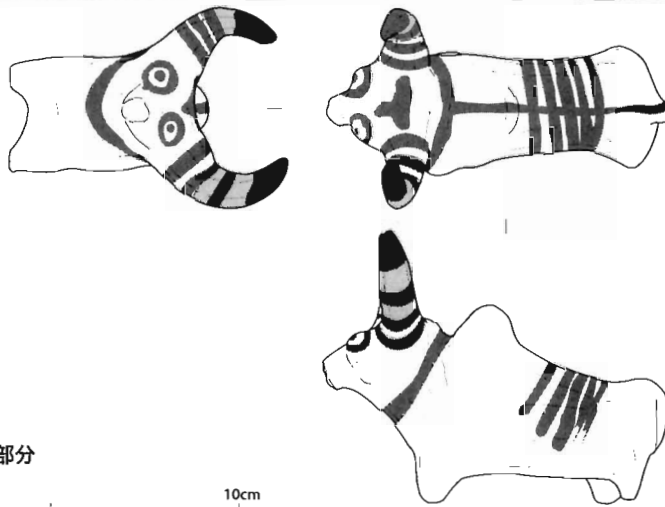
法量：全長 9.2cm、全高 7.3cm

色調：浅黄橙 10YR 8/3 (スリップ)、黒褐 10YR 3/1 (彩文)

左右の角は石膏による補修であるが、その他の部分はオリジナルと判断される資料である。ただし、随所に小さな欠落部分を補修するために石膏を充填している箇所が認められ



12



13

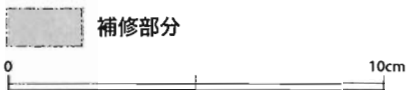


図6 オリент美術館所蔵動物土偶実測図6 (S=1/2)

る。

円柱形の胴部に逆円錐形の短い四肢がつき、粘土紐貼付による尾の表現と、若干後方に向かって突出するコブを有する。上述のように、角は補修であるが、本来このような大きく彎曲する角を有していたと考えられる。鼻先・口が短く円柱状に突出し、その左右の低く隆起した部分に円環と円点を描いて眼の表現とする。額にはT字状の文様が描かれる。首にも1条の彩線がめぐる。胴部上面中央に

は首の付根から尾の先まで1条の直線が描かれ、胴部中部でそれに直交するかたちで5条の平行線が描かれている。

彩文に先行して白色系のスリップが全面に塗布されている可能性がある。

14 コブウシ形土偶 (製 163-2759) (図7)

法量：全長 9.35cm、全高 6.7cm

色調：灰白 2.5Y 8/2 (スリップ)、にぶい橙 7.5YR 7/3(地)、黒褐 7.5YR 3/1(彩文)

左角に接合痕を確認できるが(実測図では

非表示)、本来同一個体に属するものである。粘土紐貼付による尾を欠損する。

円柱状の胴部と短い四肢、低くかつ丸く隆起するコブ、太く短い角をもつ。顔は短く突き出す鼻先と、丸く隆起させ彩文で円環および円点を描いた眼を表現する。額には逆三角形文を描く。角には平行線文、首には1条の線文を描く。

背中には首の付根から尾にかけて1条の直線を引き、それに直交させて胴部中位に6条の平行線を描く。

彩文は灰白色のスリップを全面に塗布したのちに描かれている。スリップは膜状を呈しており、一部で剥落している。彩文はいずれもオリジナルと考えられる。

15 コブウシ形土偶 (製 161-2757) (図7)

法量：全長 9.1cm、全高 6.2cm

色調：浅黄橙 10YR 8/3 (スリップ)、黒褐 10YR 3/2 (彩文)

左前肢、左後肢、右後肢および両角の先端、また顔の一部を欠損する。

円柱状の胴部に逆円錐形の短い四肢を有し、背中には低く隆起するコブをつくる。頭部左右には短く太い角をもつ。顔は短く突き出す鼻先と彩文による円環および円点で表現される眼を有する。頬の部分が丸く膨らんでいるが、他例から判断すると眼の表現に関わるものである可能性が高い。額には逆三角形文を描く。角には平行線文を、首には1条の線文をめぐらす。

背中には首の付根から尾の先にかけて1条の直線を引き、それに直交させて胴部中位に5条の平行線文を描く。尾は逆三角形の薄い粘土紐を貼りつけて表現されている。

彩文は浅黄橙色の白色がかったスリップを全面に塗布したのち描かれている可能性が高い。彩文はいずれもオリジナルと考えられる。

16 コブウシ形土偶 (製 162-2758) (図7)

法量：全長 9.1cm、全高 7.0cm

色調：にぶい黄橙 10YR 7/3 ～ にぶい橙

7.5YR 7/4 (地)、褐灰 7.5YR 4/1 ～ 灰褐 7.5YR 4/2 (彩文)

左角が別個体由来する破片を接合しているほかは、オリジナルと判断される。

円柱状の胴部と短い四肢、丸く垂直方向に隆起するコブ、大きく彎曲する角をもつ。顔は細く突き出す鼻先と、丸く隆起させ彩文で円環および円点を描いた眼を表現する。また、額には逆三角形文、角には平行線文を彩文によって施す。首には1条の線文をめぐらす。

また、背中には首の付根から尾の付根にかけて1条の直線を描き、それに直交するかたちで胴部中央に7条の平行線文をめぐらす。尾は粘土紐を右寄りに貼りつけて表現する。彩文はいずれもオリジナルと判断される。

17 コブウシ形土偶 (製 142-2730) (図8)

法量：全長 8.8cm、全高 6.7cm

色調：浅黄橙 10YR 8/3 (スリップ)、黒褐 10YR 3/2 (彩文)

完形の資料であるが、左側面に大きく細砂を含んだ液体が塗布され、胴部の彩文が不明瞭となっている。

円柱形の胴部と短い四肢、そして先細りの粘土紐貼付による尾の表現と先端が尖ったコブをもつ。頭部左右にはやや斜め前方に向かって彎曲して伸びる角を有する。丸く突出する鼻先・口をつくり、その上部のわずかに隆起させた部分に円環と円点の彩文によって眼を表現する。額には逆三角形文が描かれる。角には平行線文を描き、首には1条の彩線をめぐらせる。

胴部上面中央には首の付根から尾の先にかけて1条の直線を引き、胴部中位ではそれに直交させて4条もしくは5条の平行線を描く。

彩文に先行して白色系のスリップを全面に塗布している。

18 コブウシ形土偶 (製 141-2729) (図8)

法量：全長 9.3cm、全高 6.5cm

色調：浅黄橙 10YR 8/3 (スリップ)、黒褐

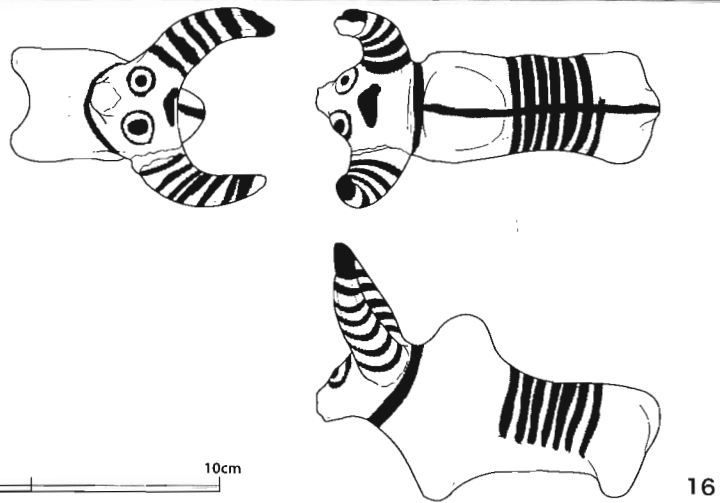
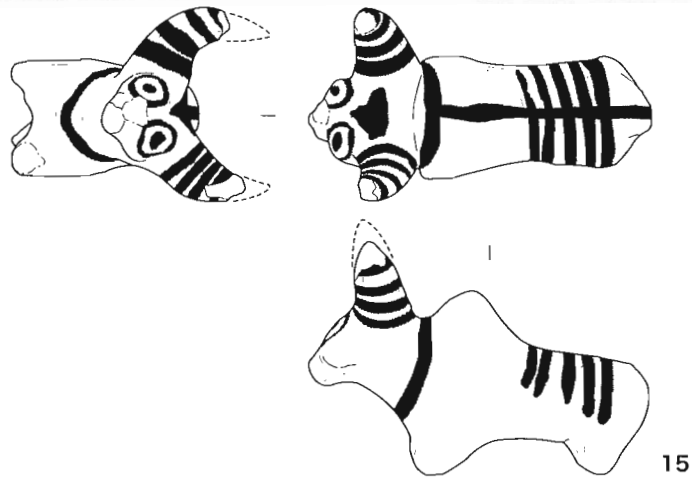
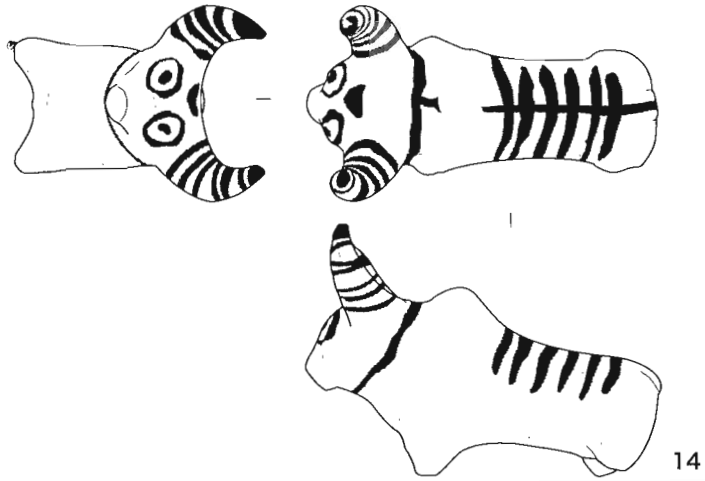
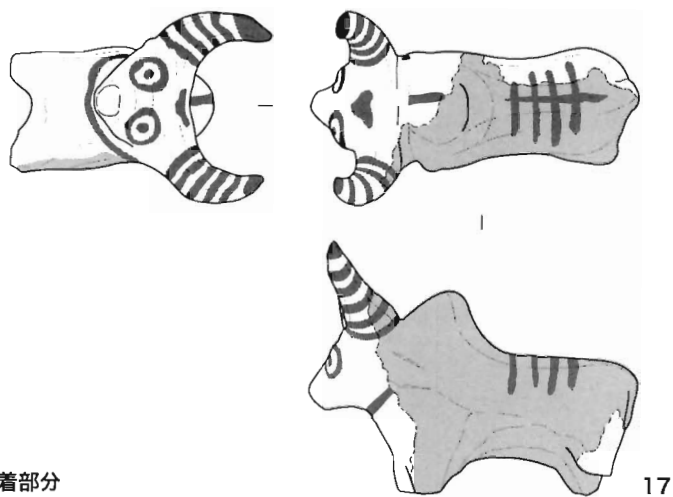
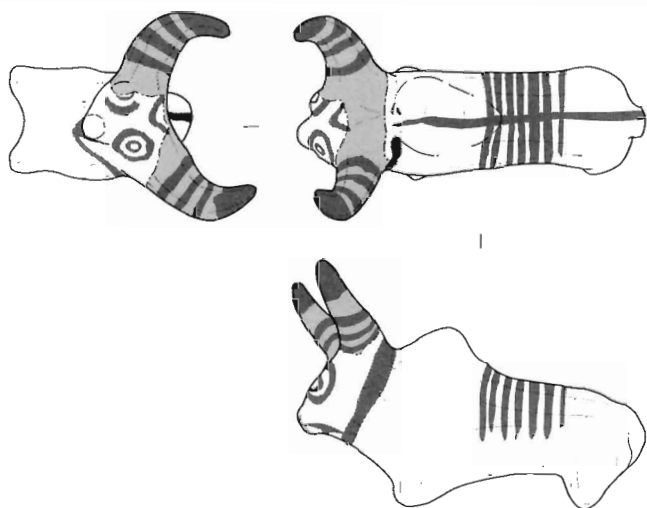


図7 オリент美術館所蔵動物土偶実測図7 (S=1/2)



17



18

補修部分

0 10cm

図8 オリент美術館所蔵動物土偶実測図8 (S=1/2)

10YR 3/1 (彩文)

本資料は左右の角が補修である。他の部分はオリジナルと判断してよいであろう。

円柱形の胴部に逆円錐形の短い四肢および丸いコブがつき、先細りの粘土紐貼付によって尾を表現する。角はやや斜め上方に向かって彎曲しつつ伸びる。顔は小さく突出する鼻先・口をつくり、その上部のわずかに隆起させた部分に円環と円点の彩文によって眼を表現する。額には逆三角形文を彩文する。首の

周りには1条の彩線がめぐらされる。

胴部上面中央には1条の直線が尾の上半まで引かれ、それに直交するかたちで胴部中央に7条の平行線が描かれる。

彩文に先行して白色系のスリップが塗布されている。

(3) 小結

以上の観察結果をもとに、所蔵資料の特徴についてまとめておくこととしたい。

本章の冒頭に述べたように、動物の種類でみるとコブウシ形土偶が16点、チーター形土偶が1点、鳥形土偶が1点で、コブウシが所蔵資料の中で卓越している。コブウシ形土偶は円柱状の胴部と短い四肢、大きく彎曲して伸びる角とコブという共通の身体的特徴を有するとともに、円環と円点を組み合わせた彩文による眼の表現と角における平行線文の点で共通し、さらに6を除いて、胴部上面中央の直線とそれに直交する平行線文という特徴を共有している。さらに眼の表現と中心軸線はチーター形土偶にも共通し、眼の表現と中心軸線+平行線文は鳥形土偶にも共通している。このような状況は所蔵資料18点が少なくとも様式的には共通した特徴を有していることを示している。

とはいうものの、細部ではさまざまな違いが認められる。まず、小形中実土偶では、7、9、10のコブが若干後方に突出するように隆起し、顎から両前肢にかけて稜をつくりだして鬘を表現する（ただし、10の頭部は鬘の部分も含めて補修の可能性が高い）。顔は細身でより立体的な造形となっている。また、コブ側面から前肢側面にかけて横位短線の列状文もしくは垂線を描くという特徴をもつ。一方、13～18ではコブは山形に隆起するのみで、顎下の鬘状表現はない。顔の造形は平板的である。さらに前者の一群に比較すると、大形化の傾向が認められる。

6については顎下に鬘状の隆起をつくる点で共通しているが、コブが頭部側による点、そして胴部の彩文パターンの違いなど、他例との差異は大きい。

12に関しては、大部分に補修が認められることからここでの検討からは外しておくことにする。

補修の手が加えられている資料が多いことから、オリジナルの部分に残る複数の要素の組み合わせからの最大公約数的な把握にとどまらざるを得ないものの、ひとまず7、9、

10を第Ⅰ類、13～18を第Ⅱ類、6を第Ⅲ類として分類することにしよう（図9）。

この小形中実土偶の視点からみると、大形中空土偶においても類似の分類が可能である。1はコブが後方に突出するとともに、顎下に鬘状の隆起をつくりだす。また、コブの上面にはイトスギ文が描かれているが、しっかりとしたコブが存在するがゆえに可能な装飾であり、コブの形が意図的につくられていることが明らかである。また、2、3に比較すると、全体の造形がより細身で立体的かつ写実的である。2と3はコブおよび四肢側面の彩文の種類が異なるものの、ほぼ共通の特徴を有している。ただし、その中でも3は頭部の突出度合いが著しく弱く、顔の造形がより平板化の傾向が否めない。

先の小形中実土偶に対応させると、1は第Ⅰ類に共通し、2、3は第Ⅱ類に近い特徴を示しているといえるだろう。4のネコ科動物土偶に関しては、顔貌および胴部の特徴からみて第Ⅱ類に含めることができる。

これらの分類は何を意味しているのであろうか。本節の冒頭に述べたように全体的な特徴から所蔵資料が一つの様式に属しているという判断が正しければ、上の分類群間にみられる差異は様式内でのヴァリエーションということになる。大形中空土偶と小形中実土偶では本来的に意味や機能、あるいは使用時のコンテキストが異なっている可能性が高いが、小形中実土偶の中での差異に着目すると、コブの形態や鬘状表現の有無は、コブウシのもつ身体的特徴に対する写実性の違いを意味している。すなわち、第Ⅰ類の方がより写実性が高く、コブウシのもつ身体的特徴を的確に表現しているのに対し、第Ⅱ類はそうした身体的特徴の細部に意識が払われていない。

この写実性を軸に判断すると、第Ⅰ類および第Ⅱ類は時間軸上での変化を示している可能性が浮上する。つまり、第Ⅰ類⇄第Ⅱ類という変化の方向性を推定することができよ

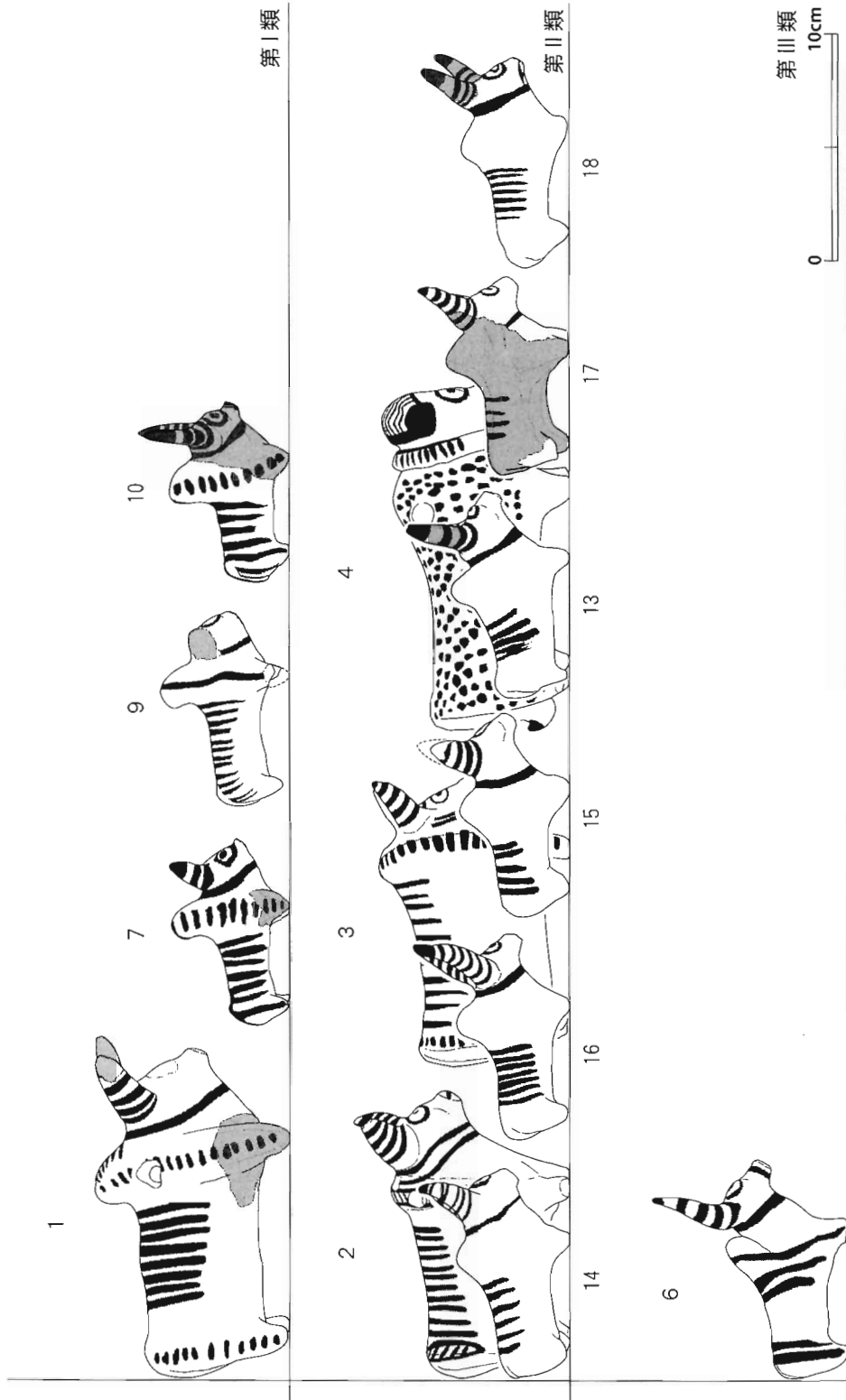


図9 オリエント美術館所蔵動物土偶分類図（図作成の便宜上、左向きの実測図も右向きに統一した）

う。さらに踏み込めば、写実性の高い第Ⅰ類がより古相を示し、第Ⅱ類がより新相を示しているとの想定が可能である。

この視点でみると、第Ⅲ類は第Ⅰ類よりも古いか、もしくは第Ⅱ類よりも新しい可能性が考えられる。ただし、後述のナール (Nal) 遺跡Ⅲ期で類似するコブウシ形土偶が出土しており、この点を重視すれば第Ⅰ類よりも古い可能性が高いといえるだろう。

3 先インダス文明期からインダス文明期における動物土偶の変遷

本章では、イラン南東部からインダス平原にかけて地域別に先文明期から文明期にかけての代表的な遺跡の出土資料を取り上げ(図 10、表 1)、動物土偶の時間的変遷および空間的変異を把握する基礎とすることとしたい。その上でオリエント美術館所蔵資料の帰属文化を推定する。

(1) ヘルマンド川流域およびイラン高原南東部

1 シャフリ・ソフタ遺跡(図 11: 1~10)

シャフリ・ソフタ (Shahr-i Sokhta) 遺跡はイラン南東部のヘルマンド川下流域に位置する拠点遺跡である。数次に及ぶ発掘調査が実施されており、前 4 千年紀後半から前 3 千年紀にかけての遺跡であることが知られている (Tosi ed. 1983; Salvatori and Vidale 1997)。

この遺跡では、これまでに 4 点の動物形容器と 35 点の動物土偶が報告されている (Tosi ed. 1983; Salvatori and Vidale 1997)。Tosi ed. 1983 によると、Ⅰ期からの出土例はきわめて少なく、ほとんどがⅡ・Ⅲ期の出土であるという。ただし、主体はⅡ期で、Ⅲ期には激減するという。

一方、Salvatori and Vidale 1997 ではフェイズ 5 を中心に出土していることが報告されている。フェイズ 5 は Tosi 編年ではⅡ期に相当するので、実年代でいえば前 4 千年紀後

半を中心に動物土偶が出土していることがわかる。

まず、動物の種類でみていくと、コブウシが 14 点で最多で、コブのないウシ 3 点、鳥 1 点、イノシシ 2 点、イヌ 1 点、ネコ 2 点、ヒツジ 1 点、不明 11 点である。コブウシ、鳥、イノシシ、ヒツジはその身体的特徴が明確に表現されているので、動物の種類の特定が可能であるが、それ以外は不明例も含めて、動物の特定を可能にする細部表現がない。全体的に単純な造形であることが特徴であるといえよう。ただし、目を沈線+刺突、もしくは円形粘土板貼付+刺突によって表現する例や、鼻を刺突、口を沈線で表現する例も存在する点は注目される。図 12-7 は後述のメルガル遺跡Ⅶ期出土のコブウシ形土偶に類似している。

装飾技法では刺突および彩文があるが、そもそも装飾を施した例がきわめて少ないことから、特定の動物との関連性は認められない。

2 ムンディガク遺跡(図 11: 12~14)

ムンディガク (Mundigak) 遺跡はヘルマンド川上流にあたるヒンドークシュ山脈南麓に位置する遺跡で、イラン高原南東部とパローチスターン高原を結ぶ交通路の要衝として評価できる遺跡である。発掘調査によって前 4 千年紀から前 3 千年紀にかけての文化変遷が確認されている (Casal 1961)。

前 4 千年紀前半のⅠ期から動物土偶が出土しているが、写真が報告書に掲載されているのは前 4 千年紀後半のⅡ期から前 3 千年紀前葉のⅣ期にかけて動物土偶である。Ⅳ期の動物土偶が細部表現において最も多様であるという。写真図版に掲載されたものではコブウシが中心で、ほかは動物の種類の特定が難しいものである。Ⅳ-3 期出土例のうちの 1 点は胴部に斜格子を充填する柳葉状の区画文が描かれており、オリエント美術館所蔵資料との類似性を窺わせている。

3 バンプール遺跡(図 11: 11)

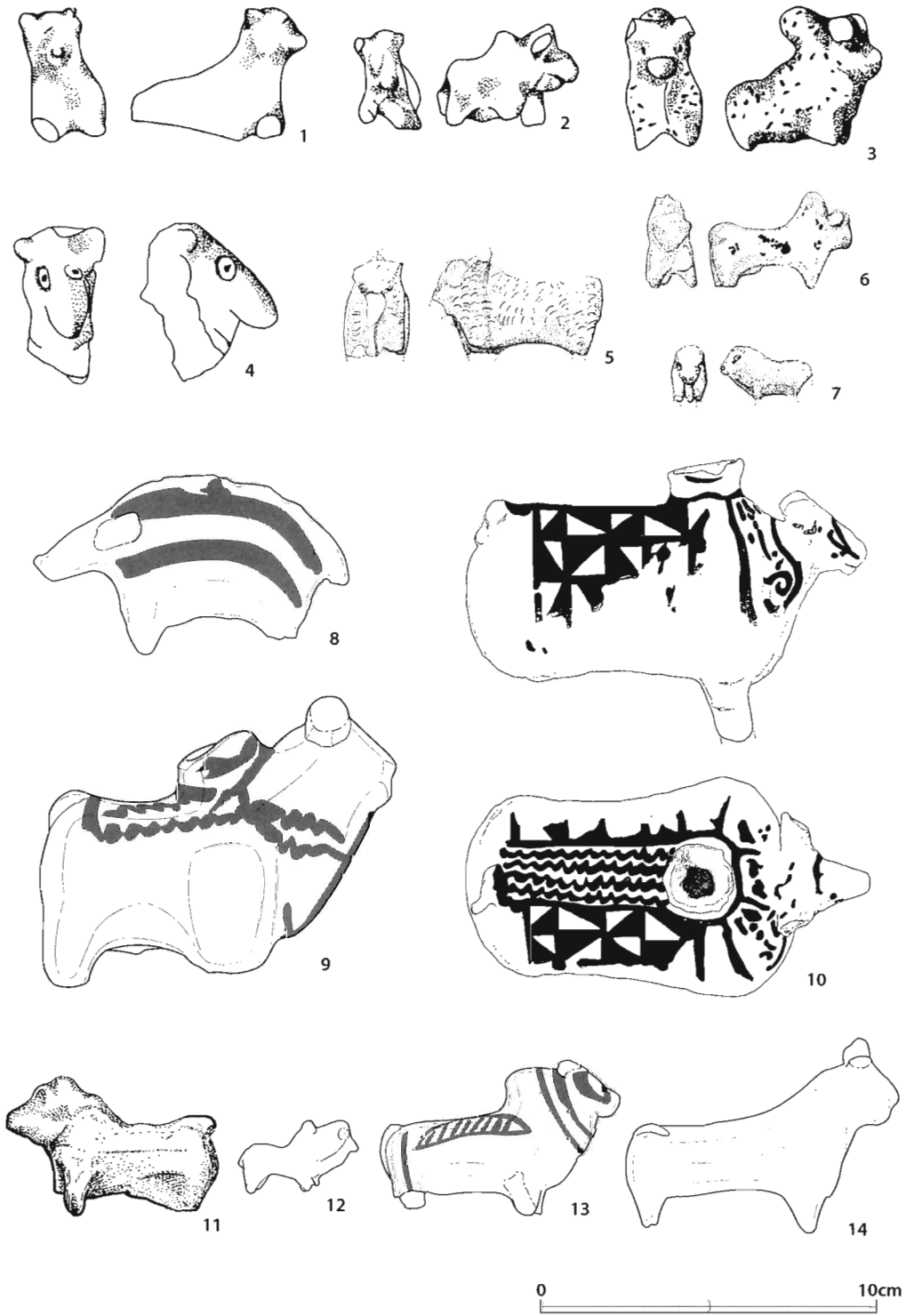


図11 イラン高原南東部出土動物土偶 (S=1/2)



図12 バローチスターン地方出土動物土偶1 (S=1/2)

バンプール (Bampur) 遺跡はイラン南東部でもその南部に位置する遺跡で、イラン南東部と南のマクラーン地方との関係を考える上で重要な遺跡である。発掘調査によって前3千年紀を通して居住された遺跡であることがわかっている (De Cardi 1970)。

この遺跡では、V期から粗雑な成形による動物土偶が1点出土している。動物の種類は不明である。

(2) バローチスターン高原南部

4 ナール (ソーフル・ダンプ) 遺跡

(図12: 4~8)

ナール (ソーフル・ダンプ) (Nal/Sohr Damb) 遺跡はバローチスターン地方南部に位置する遺跡で、前4千年紀から前3千年紀まで長期にわたって居住された拠点遺跡である。H. Hargreaves および U. Franke

による2次の発掘調査が実施されている (Hargreaves 1929; Franke-Vogt 2005a, 2005b)。

まず、Hargreaves の調査からみていくと、20点の動物土偶が記録されており、1点がヒツジ形であるのを除くと、ほかはいずれもウシ形土偶とされる。うち4点の写真が掲載されているが、3点はコブウシ、1点がヒツジである。写真図版が不鮮明であることから、細部表現は判然としないが、円錐形に突き出すコブや彩文がみられない点などはオリエント美術館所蔵資料との違いである。

次に Franke による調査についてみると、前4千年紀後半に位置づけられるⅡ期から1点、前3千年紀前半に位置づけられるⅢ期から4点の動物土偶が報告されている。

Ⅱ期の動物土偶はコブウシで、頭部に比して細く伸びる胴部を特徴とする。類似資料が

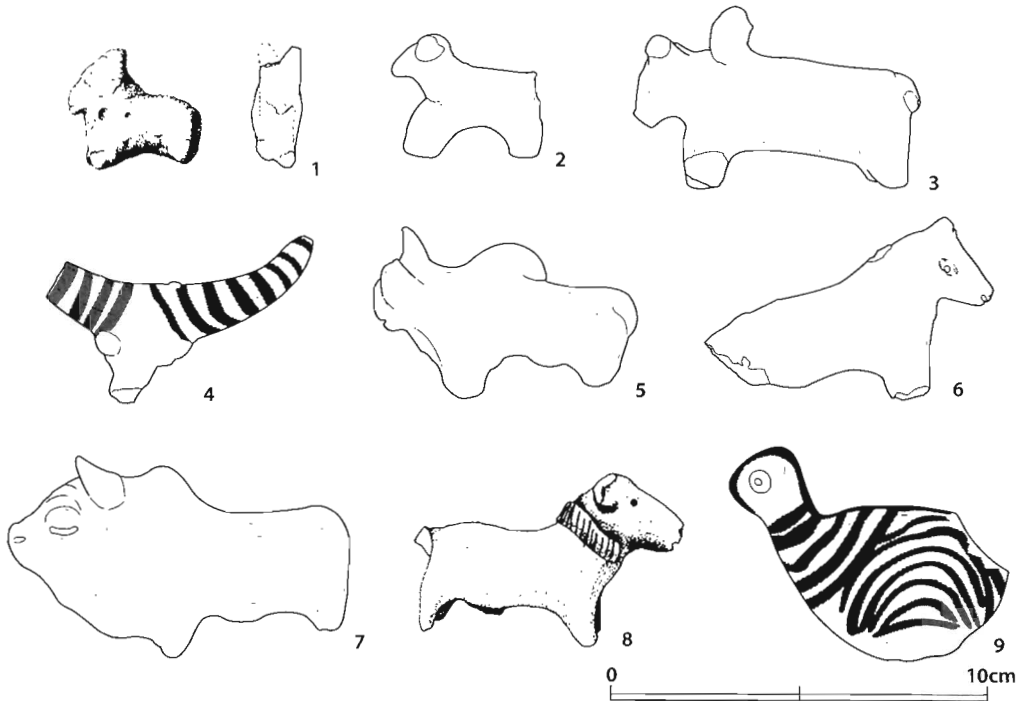


図 13 バローチスターン地方出土動物土偶 2 (S=1/2)

Hargreaves の調査でも報告されている。

Ⅲ期の動物土偶はコブウシ 3 点、ヒツジ 1 点で、1 点のコブウシをのぞいていずれも平行線文あるいは斜格子充填区画文からなる彩文を施す。オリент美術館所蔵資料にきわめて近い特徴を有しており、所蔵資料の位置づけを考える上で重要である。

5 クッリ遺跡 (図 12 : 1)

クッリ (Kulli) 遺跡はバローチスターン地方南東部を代表する遺跡で、A. Stein によって小規模な発掘調査が実施されている (Stein 1931)。出土土器についてみると、クッリ式土器が主体的であり、前 3 千年紀後葉を中心とする時期と判断できる。

6 点の動物土偶が出土しているが、その特徴はオリент美術館所蔵資料に共通する (Pls. XXII, XXIII)。すなわち、大きく突出するコブ、短い四肢、そして平行線文や斜格子充填区画文をもつコブウシ形土偶である。

6 メーヒー遺跡 (図 12 : 2)

メーヒー (Mehi) 遺跡はクッリ遺跡と並ぶバローチスターン地方南東部を代表する遺跡である。A. Stein によって発掘調査が実施され (Stein 1931)、前 3 千年紀前半から後半にかけての遺物が確認されている。

出土遺物の中には動物土偶もあり、正確な出土点数は不明であるものの、Stein の記載によればコブウシ形土偶が卓越し、2 点のみヒツジ形土偶が出土しているという。写真図版 (Pl. XXXI) に掲載されたコブウシ形土偶をみると、斜め上方に突き出す角、明確に表現されるコブ、短い四肢に加えて平行線文および列点文からなる彩文が頭部から胴部にかけて施されており、その特徴はオリент美術館所蔵資料にまったく同一である。

7 ズイク遺跡

マクラーン地方東部に位置するズイク (Zik) 遺跡では、A. Stein が踏査を行い、ナール式土器とともに 1 点の動物土偶が採集されている (Stein 1931: Pl. XXI)。写真図版によ

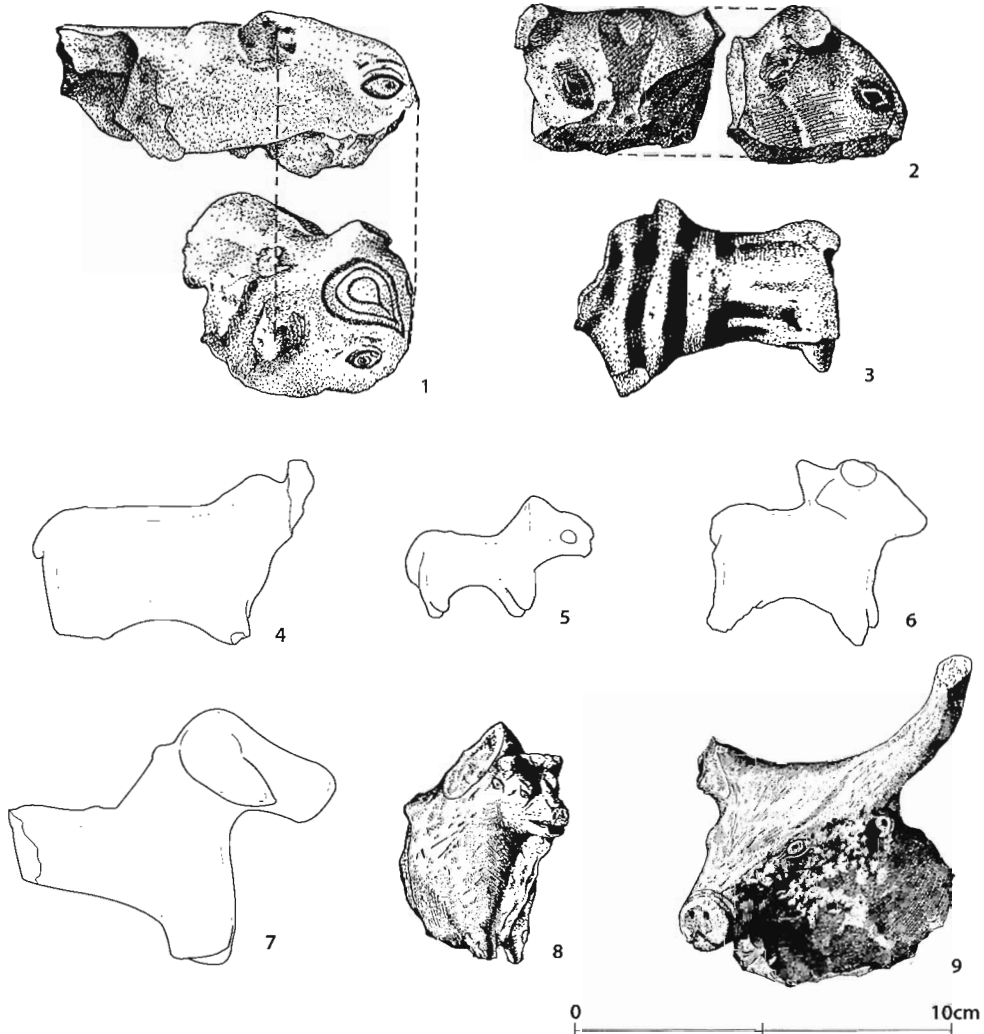


図14 バローチスターン地方出土動物土偶3 (S=1/2)

ると、コブウシ形土偶で、胴部に平行線文が彩文されている。この資料がナール式土器に伴うものであるのか、異なる時期の所産であるのか、表面採集資料品であるために不明である。

8 シャーヒー・トゥンプ遺跡 (図12:3)

シャーヒー・トゥンプ (Shahi Tump) 遺跡はバローチスターン高原南部のマクラーン地方に位置する遺跡で、A. Stein および R. Besenval 率いるフランス隊による2次の発掘調査が実施されている (Stein 1931;

Besenval 2005)。

Stein の調査で動物土偶が出土しており、10点の資料が写真図版 (Pl. XIV) に掲載されている。うち8点はいずれもコブウシ形土偶と判断でき、残る2点はコブがみられないものの、欠損かどうか不明である。縮尺が示されていないので、正確な大きさはわからないものの、小形から中形のものまでである。写真図版が不鮮明なため判断としないが、確実にうち2点には平行線文や斜格子充填区画文が施されており、オリエント美術館所蔵資料

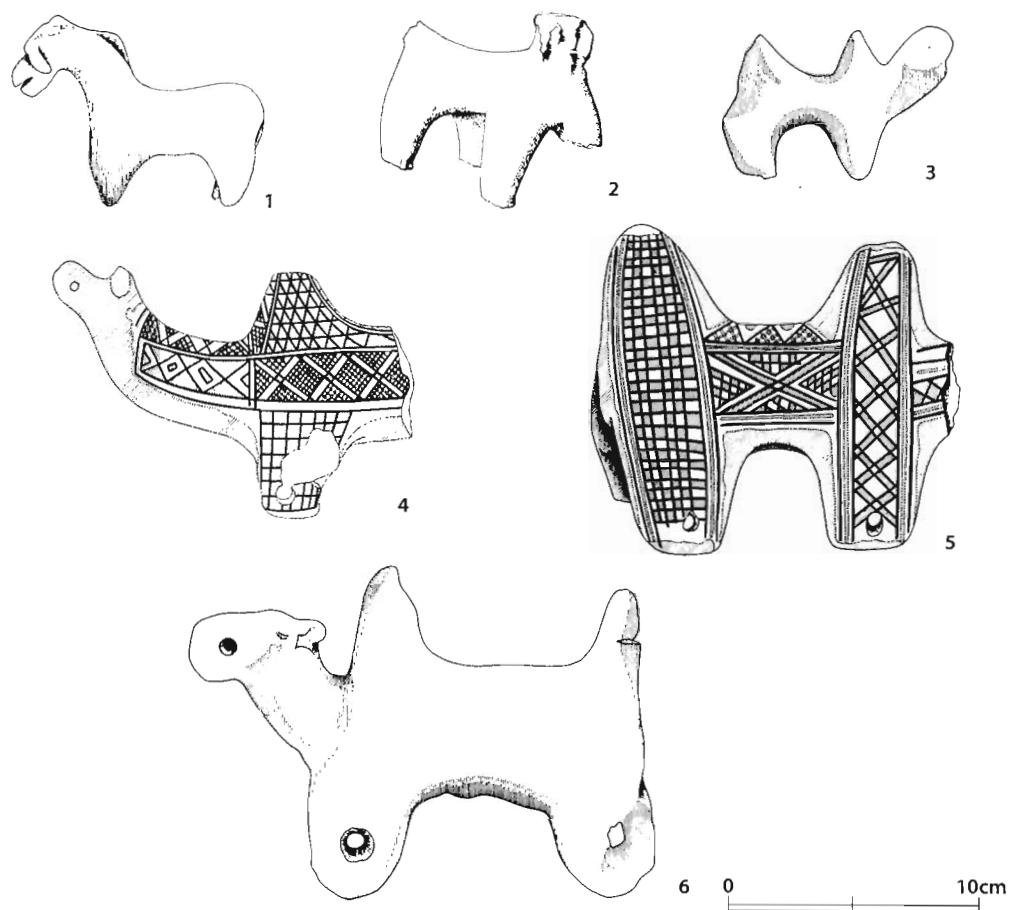


図15 バローチスターン地方出土動物土偶4 (S=1/3)

に類似する。

(3) バローチスターン高原中央部

9 メヘルガル遺跡 (図13)

メヘルガル (Mehrgarh) 遺跡は、バローチスターン高原中央部の東縁に位置するカッチー平原の遺跡で、前7000～前6500年頃にさかのぼる新石器文化期から前3千年紀前葉にまで続く拠点遺跡である (Jarrige, C. *et al.* 1995)。

この遺跡では、ⅡA期以降、数は少ないものの各時期から動物土偶が出土している。

ⅡA期からは1点のみが実測図とともに報告されている (図13: 1)。2本の垂直に伸びる角をもつ。未焼成である。ウシを表現し

たものと考えられる。

ⅢC期からはコブウシ1点、ヒツジ1点、彩文のあるウシ2点が報告されている (図13: 2～4)。コブウシとヒツジは太い円柱状の細部表現の乏しい胴部に短円柱状の脚が伴う。コブウシの場合は成形の粗いコブをもつ。顔貌表現を含めて細部表現はない。彩文のあるウシは頭部のみの出土であるが、長く伸びる角に平行線文が彩文される。

Ⅳ・Ⅴ期からの報告はなく、Ⅵ期にコブウシ1点、イヌに推定される例1点が報告されている (図13: 5・6)。いずれも単純な造形であるが、目を沈線+刺突、鼻を刺突、口を沈線によって表現する。

Ⅵ期もしくはⅦ期の出土例とされる例とし

て、ヒツジ形土偶がある。頭部のみの出土であるが、平行沈線の施された大きく巻く角をもち、眼・鼻が沈線によって表現されている。写実的な表現を特徴とする。

Ⅶ期は最も出土例が多く、12点が報告されている。コブウシ、ヒツジ、鳥が確認できる(図13:7~9)。コブウシは短脚で、頭部が大きくつくられる。コブはあまり強調されない。眼を棒状工具による短沈線で表現する。彩文はない。11.24-bに挙げられた例は首のまわりに彩文が施されている可能性がある。ヒツジは全長7cm前後を測る完形で、小さく表現された巻き角と粘土紐貼付+沈線による首飾りをもつ。目・鼻・口が刺突または沈線によって表現されている。鳥は胴と頭からなる単純な造形で、目を粘土板貼付+刺突によって表現する。胴部側面には半円形同心円、頸には平行線を描く。頭部の中央にも1条の彩文が施されている。動物の種類は不明であるが、胴部に交差平行線文を描いた例もある。

10 ダンプ・サダート遺跡(図14:1~3)

ダンプ・サダート(Damb Sadaat)遺跡はバローチスターン高原中央部のクエッタ盆地に所在する遺跡で、発掘調査によって、先文明期終末頃に位置づけられるⅡ期およびⅢ期から動物土偶が出土している(Fairservis 1956)。

出土総数は明記されていないが、図示された例は16点で、コブウシの頭部と推定されるもの4点、コブウシの胴部3点、コブウシの角2点、コブウシの脚部2点、ウマもしくはロバに推定される下半身の破片1点、アンテロープに推定される頭部1点、中空の鳥形土偶の胴部片3点(うち1点は表面採集資料)である。

彩文が多用されているのが特徴であり、胴部や角には平行線文が描かれている。その中で注目されるのは額に水滴形の文様を描いた例であり、オリエント美術館所蔵資料のコブ

ウシ形土偶に関連する特徴と考えられる。

11 ピーラク遺跡(図15)

ピーラク(Pirak)遺跡はメヘルガル遺跡と同様にカッチー平野に所在する遺跡で、前2千年紀を中心とする時期に属する(Jarrige *et al.* 1979)。ポスト・インダス文明期の代表的な遺跡であるが、出土した遺物は、以下に述べる動物土偶も含めてインダス文明期の遺物群とは異なる特徴を有している。

この遺跡ではⅠ~Ⅲ期に動物土偶が出土している。表現される動物の種類には、コブウシ、ウマ、ラクダ、その他不明の動物がある。

コブウシは全長10cm以下の小形で、コブと角のほかは明確な細部表現を伴わない。ウマとラクダには彩文土器に共通する市松状格子目文を中心とする彩文を施す例が存在する。その一方で無文の例も存在する。コブウシに比較すると全長15cm前後となる大形の例を含む。ラクダの中には四肢側面に穿孔を施した例があり、木製の軸棒を差し込んで車輪を固定するためのものと考えられる。

(4) バローチスターン高原北東部

12 ペリアーノ・グンダイ遺跡(図14:8・9)

ペリアーノ・グンダイ(Periano Ghundai)遺跡はバローチスターン高原北東部のジョーブ川流域に所在する拠点遺跡である。この遺跡ではA. Stein およびW. A. Fairservisによる2次の発掘調査が実施されている(Stein 1929; Fairservis 1959)。出土土器からみると、前3千年紀前葉の初期ハラッパー文化段階からインダス文明期にかけての遺跡であることがわかる。

まず、Steinの調査による資料からみていくと、出土総数は不明ながら4点の動物土偶が写真図版に掲載されている。うち2点はコブウシ形土偶である。彩文の有無等、細部表現は判然としないが、1点は大形で円筒状もしくは円柱状の胴部をもつ。これらの資料が先文明期に属するものか文明期に属するもの

か判断できない。

Fairservis の調査では、コブウシ形土偶 1 点、コブウシかどうかわからないがウシであることが明らかな頭部片 1 点が出土している。後者は頭部だけで 15cm 近くの長さをもつ大形品で、ほかに類例のない資料である。また、ともに他地域にはみない写実的な表現様式をとっている。これらも相伴土器が不明で、先文明期か文明期のいずれに属するものか不明である。

13 ダーバル・コート遺跡

ダーバル・コート (Dabar Kot) 遺跡でも A. Stein および W. A. Fairservis による 2 次の発掘調査が実施されているが (Stein 1929; Fairservis 1959)、Fairservis の発掘調査報告で 3 点の動物土偶が図示されている。ただし、いずれも表面採集品であり、歴史時代の文化層の存在も考慮すると、その帰属時期は不明である。ちなみに 2 点は簡素な小形のコブウシ形土偶、もう 1 点は不明である。

(5) ゴーマル地方

14 ラフマーン・デーリ遺跡 (図 14: 6・7)

ラフマーン・デーリ (Rehman Dheri) 遺跡はパローチスターン高原北東部と東のパンジャブ平原をつなぐゴーマル地方の拠点遺跡で、前 4 千年紀後半から前 3 千年紀前葉を中心に展開したことが発掘調査によって明らかとなっている (Durrani 1988; Durrani *et al.* 1991; Ali 1994-95)。

ラフマーン・デーリ遺跡ではこれまでに 398 点の動物土偶が報告されている (Durrani *et al.* 1991; Ali 1994-95)。ただし、(Durrani *et al.* 1991) によれば、報告された 11 点のうち 7 点は破片で動物の種類が不可能である。残る 4 点はいずれもコブウシに推定される。いずれも動物の身体的特徴のみを表現したもので、装飾等の細部表現はない。なお、胴部下身の破片であるが、交差平行線文を描いた例がある。

Ali 1994-95 によれば、132 点の発掘調査出土品と 255 点の表面採集資料が報告されており、その内訳はコブウシ 174 点、ウシ 15 点、ヒツジ 9 点、イヌ 15 点、ライオン 2 点、ジャッカル 1 点、ゾウ 2 点、トラ 1 点、二頭獣 1 点、不明 (破片を含む) 167 点とされる。ただし、イヌ以下に関しては報告書に掲載された写真でみるかぎり、動物の特定が困難である。

15 ジャーンディ・バーバル B 遺跡

(図 14: 4・5)

ジャーンディ・バーバル (Jhandi Babar) 遺跡は A・B 2ヶ所の遺跡からなり、いずれもバンヌー地方のシェーリ・ハーン・タラカイ (Sheri Khan Tarakai) 遺跡に共通する、前 5 千年紀末から前 4 千年紀前半にかけての遺物が出土している (Ali and Khan 2001; Khan *et al.* 2000)。さらに前 4 千年紀後半のトチ・ゴーマル文化期の遺物も確認されている。

この遺跡では発掘調査で出土した 3 点、表面採集資料 13 点の動物土偶が報告されている (Ali and Khan 2001)。コブウシに推定できるか、もしくはその可能性のあるものが 7 点で、ほかは不明である。2 点はコブウシに伴うと考えられる角の破片である。いずれも四肢・胴部・コブといった基本的特徴以外の細部表現を欠く単純な造形である。

(6) シンド地方

16 モヘンジョダロ遺跡 (図 16)

モヘンジョダロ (Mohenjodaro) 遺跡はいうまでもなくインダス文明期を代表する都市であり、最も広範に発掘調査が実施されている (Marshall 1931; Mackay 1938; Dales 1965; Alcock 1986)。調査面積から判断すると、インダス遺跡の中で最多数の動物土偶が出土していると想定されるものの、その出土総数は不明である。

この遺跡に関しては、Marshall による報

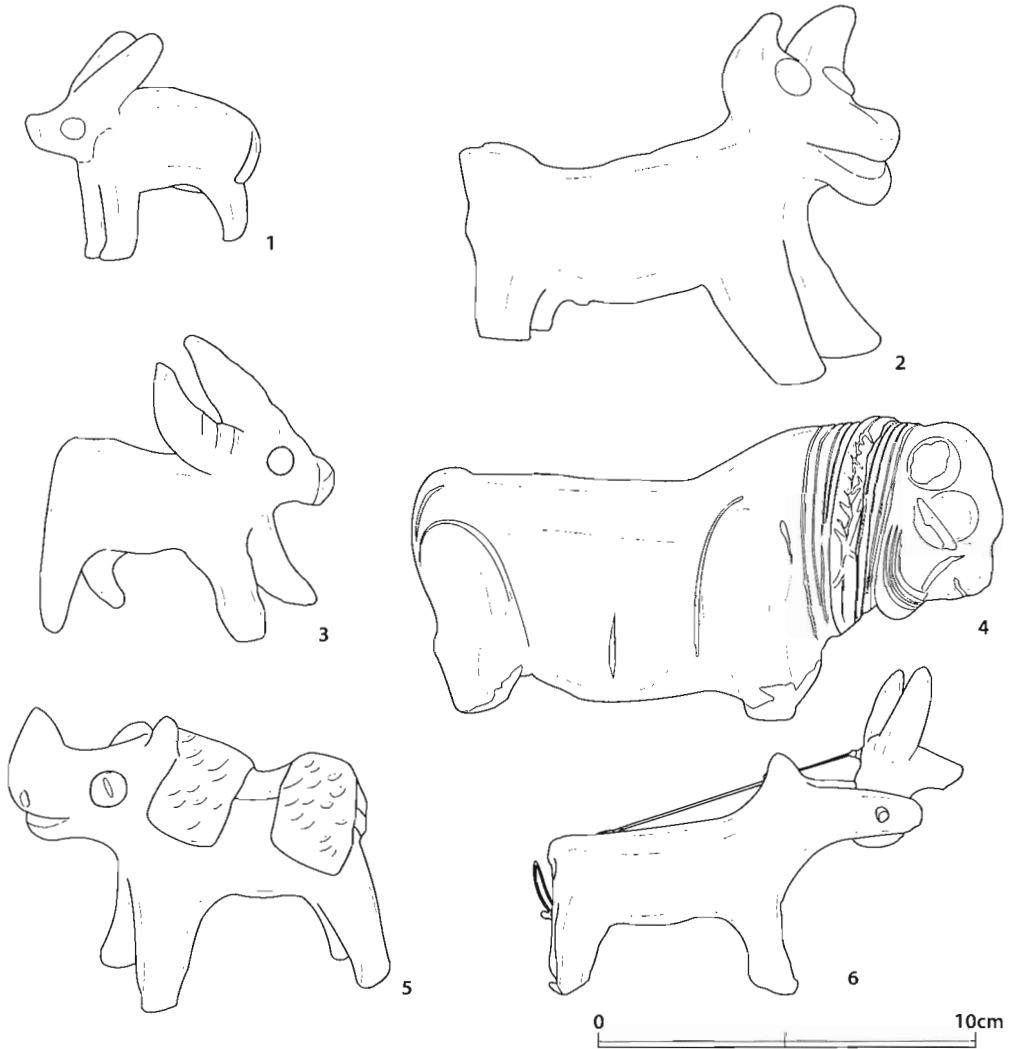


図16 シンド地方出土動物土偶1 (S=1/2)

告 (Marshall 1931) および E. J. H. Mackay による報告 (Mackay 1938) に動物土偶の報告がある。いずれの報告においても Mackay が動物土偶の記述を担当している。

Marshall 報告においては、短角のウシが最も多く、次いでコブウシ、ヒツジ、サイ、イヌと続く。ほかにはゾウとブタがそれぞれ2点ずつ出土したという。Mackay 報告では、出土点数の割合は示されていないが、ガゼル、カメ、コブウシ、短角ウシ、ウマ、ゾウ、ブタ、サイ、ヒツジ、スイギュウ、ウサ

ギが特定されている。報告書に掲載された写真をみる限り、ここに挙げられた動物の土偶はいずれもそれぞれの特徴を捉えたものであり、Mackay の同定に首肯することができる。

モヘンジョダロ遺跡の出土資料では、粘土貼付や刺突、刻線によって細部表現がなされた例が多い。そのうちサイや写実性の高い短角ウシはハラッパー遺跡に共通する細部表現の特徴をもつ。

17 チャヌフダロ遺跡 (図17)

チャヌフダロ (Chanhudaro) 遺跡では、

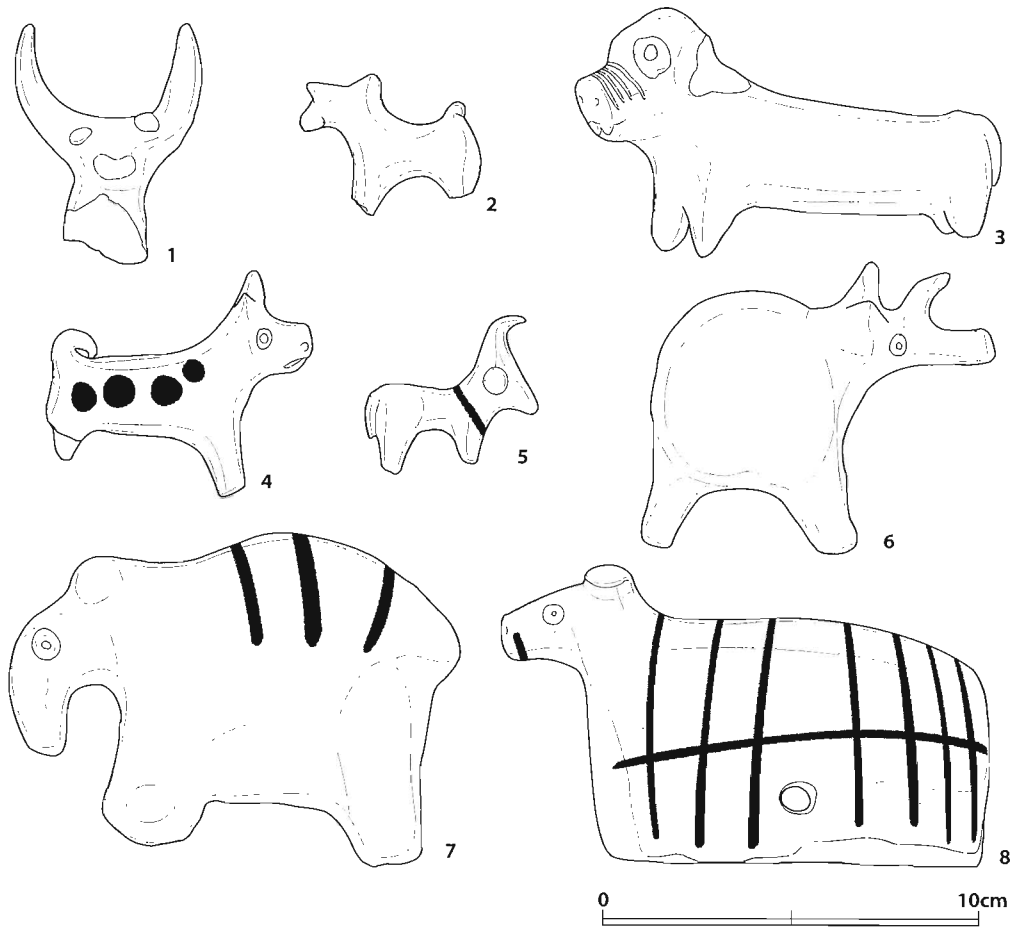


図17 シンド地方出土動物土偶2 (S=1/2)

発掘調査によって文明期からポスト文明期にかけての遺構・遺物群が確認されている (Mackay 1943)。

動物土偶ではコブウシ、イヌ、ゾウ、サイ、ヒツジ、鳥が出土している。粘土貼付による眼の表現が一般的で、平行線文を彩文した例も確認できる。サイやゾウでは胴部が球形に膨らんだ例があり、同遺跡出土の人物土偶にも共通する造形となっている。

興味深いのは胴下端付近に穿孔を施して、車輪を組み合わせる構造になった例の存在である。3点が図示されているが、これらはいずれもヒツジに推定される。1例は交差平行線文が描かれている。

(7) パンジャーブ地方西部

18 ハラッパー遺跡 (図18)

ハラッパー (Harappa) 遺跡はモヘンジョダロ遺跡に並ぶ都市遺跡で、1921～1934年までの M. S. Vats による調査 (Vats 1940) と 1946年 R. E. M. Wheeler (Wheeler 1947) による調査、そして 1986年以降のアメリカ調査隊 (Meadow ed. 1991 など) による調査と3次に及ぶ発掘調査が行われているが、動物土偶に関して報告が得られるのは Vats による調査のみである。

報告書には出土点数は示されていないが、ウシが最も多く、その中でもコブウシが卓越

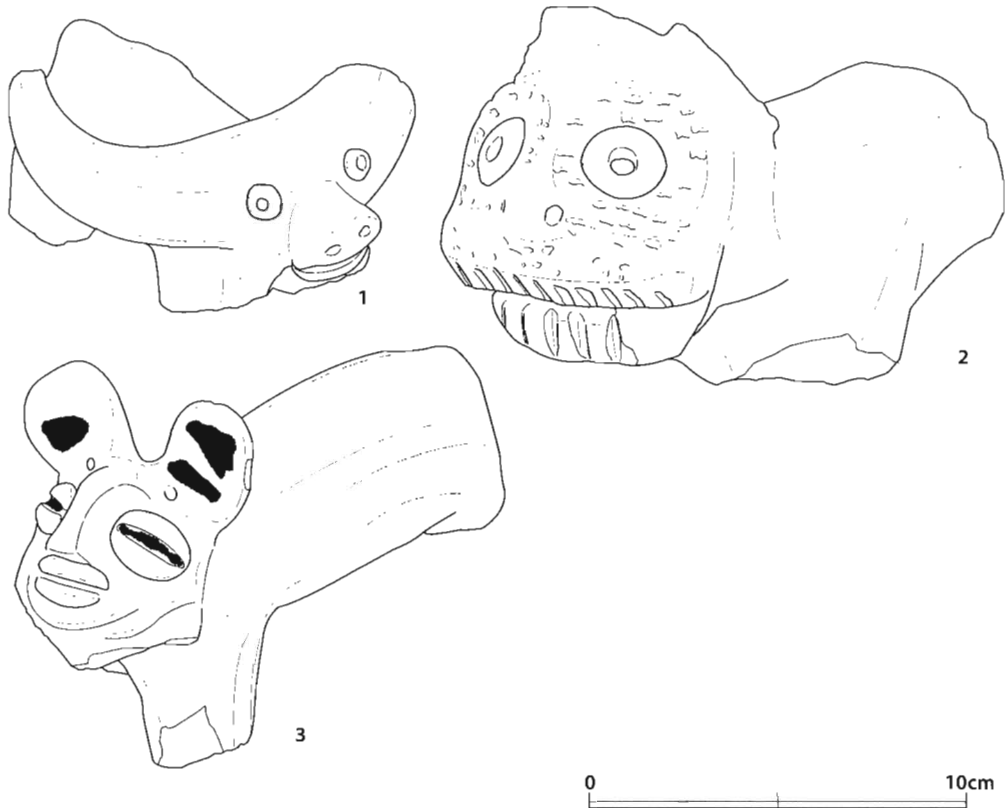


図18 パンジャーブ地方西部出土動物土偶 (S=1/2)

するという。次いで多いのがサイで、ヤギ、ヒツジと続く。イヌ、サル、ネコ、トラ（もしくはライオン）、ゾウ、ブタも出土しているとされる。さらにリス、マンガース、ヘビ、アルマジロも特定されている。残念ながら各動物の代表例の写真は限られており、その動物の同定には多くの疑問がある。他の遺跡の出土資料と重ね合わせて考えると、コブウシ、サイ、ゾウ、ヒツジ、トラはその可能性が高いが、ほかは怪しいであろう。

写真が掲載された例でみると、コブウシは1点が彩文を施す以外は無文であるのに対して、サイやトラは粘土貼付+刺突によって細部表現を施す傾向がある。鳥は脚台を伴う例や、下面に棒を差し込むための2個の穿孔がなされた例が存在する。

また、十分な資料は公表されていないもの

の、アメリカ隊による調査でも動物土偶が出土しており、特にインダス文明前期に相当する3A期からは前肢および後肢がそれぞれ一体化したコブウシ形土偶が特徴的に出土しているという (Kenoyer 1991)。

(8) パンジャーブ地方東部 (ガッガル平原)

19 バロール遺跡 (図19: 1~3)

後述のカーリーバンガン遺跡からガッガル川を85km下ったところに位置するバロール (Baror) 遺跡では、発掘調査によって13点以上の動物土偶が出土している (Sant *et al.* 2005)。概報しか出版されていないため詳細は不明であるが、先文明期終末の初期ハラッパー文化期に位置づけられるⅡ期から1点、文明期に位置づけられるⅢ期から12点が写真とともに報告されている。

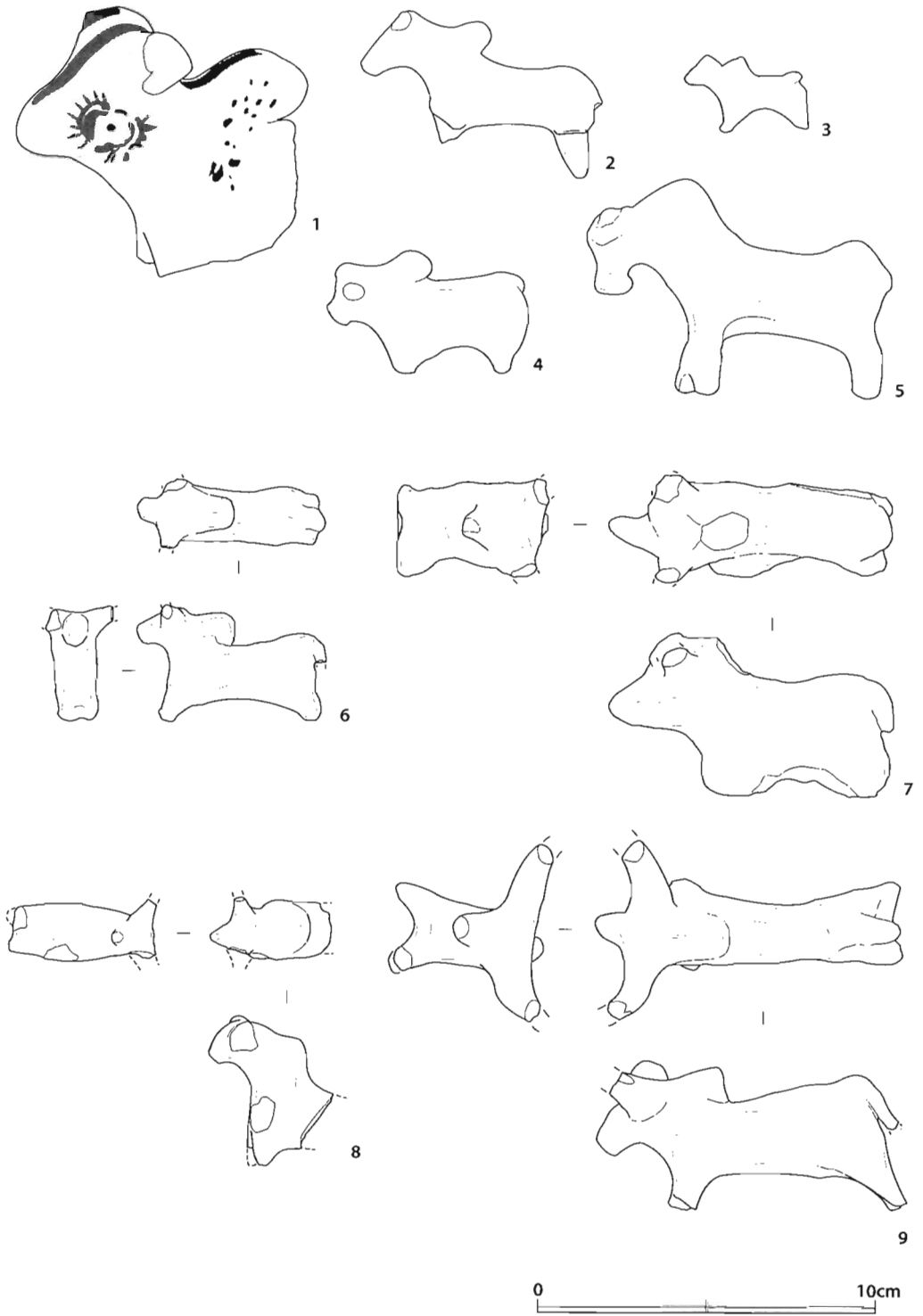


図 19 パンジャーブ地方東部出土動物土偶 (S=1/2)

Ⅱ期の例はコブウシの上半身から頭部にかけての破片で、彩文による細部表現が施されている(図19:1)。Ⅲ期の例はコブウシが7点と半数以上を占め、ヒツジを表現したとされるものが1点あるほかは、動物の種類の特定は困難である。いずれも細部表現は限定的で、コブウシの場合では角とコブ、ヒツジの場合は巻角によって特定できる程度である。1点のみウシの可能性をもつ動物の顔を写実的に表現した例があり、他例とは著しく異なっている。

20 カーリーバンガン遺跡(図19:4・5)

カーリーバンガン(Kalibangan)遺跡はパンジャブ平原東部を流下するガッガル川の中流域に位置する遺跡で、発掘調査によって先文明期から文明期にかけての遺構・遺物群が検出されている。城塞域と居住域を東西に並置する平面配置はモヘンジョダロ遺跡やハラッパー遺跡に共通しており、パンジャブ地方西部やシンド地方との強い関係性が推定される遺跡である。現在のところ先文明期の遺構・遺物群に関する報告書が刊行されている(Lal *et al.* 2003)。

先文明期に位置づけられるⅠ期では4点の動物土偶が報告されている。いずれもコブウシで、胴部中位でくびれて臀部が大きくなるという胴部形態を示し、やや下を向く頭部と明確なコブをもつ。写真図版と記載から判断すると、短い切れ込みによって前肢を分離する例もあるものの、一体化した前肢および後肢をもつようである。彩文などの細部表現・装飾はない。

後述のファルマーナー遺跡の例と比較すると、彩文や刻線等による細部表現がない点、前肢および後肢を一体化させる点などの共通性がある。ハラッパー遺跡3A期およびファルマーナー遺跡に共通する型式が先文明期にさかのぼるのかどうか、カーリーバンガン遺跡の4例のみでは即断できないが、先文明期から文明期にかけての動物土偶の型式学的連

続性を示す可能性があることは重要である。

21 ビッラーナー遺跡

カーリーバンガン遺跡からガッガル川を約140km さかのぼったところに位置するビッラーナー(Bhirrana)遺跡では、概報のみで詳細は不明であるが、文明期に位置づけられるⅡB期から13点の動物土偶が報告している(Rao *et al.* 2004, 2005, 2006)。

7点がコブウシで、一角のコブウシ1点(概報では一角獣とされるが、コブをもつ)、複合獣とされる2体の動物を上半身で一体化させたものが1点、ほか動物の種類の特定が困難なもの4点となっている。複合獣が爪形の刺突文、不明動物例の1点が刺突列点文によって装飾されるほかは、コブや角などの動物の身体的特徴以外の細部表現はみられない。

22 ファルマーナー遺跡(図19:6~9)

パンジャブ地方東部のチョウタング川流域に位置するファルマーナー(Farmana)遺跡では、インダス文明期の居住域から動物土偶が出土している(Shinde *et al.* 2008)。

この遺跡の調査には筆者も関わっており、現在報告書の作成作業を進めているところであるが、現時点で確認している動物土偶は16点で、いずれもコブウシである。大きく彎曲しながら伸びる角と小さく突出する顔をもち、ほかの彩文を含めた細部表現はみられないという特徴がある。また、前肢と後肢がそれぞれ一体化した例が多く、四肢がそれぞれ独立した例は少ない。

出土土器からみると、ハラッパー遺跡3A期、すなわちインダス文明期前期に属するハラッパー式土器が出土しており、動物土偶もまたインダス文明期前期を中心とする時期のものである可能性が高い。この時期推定を前提にすると、上述のように時期的に併行するハラッパー遺跡3A期でも前肢と後肢がそれぞれ一体化した例が特徴的に出土しており、パンジャブ地方西部に共通する型式がパン

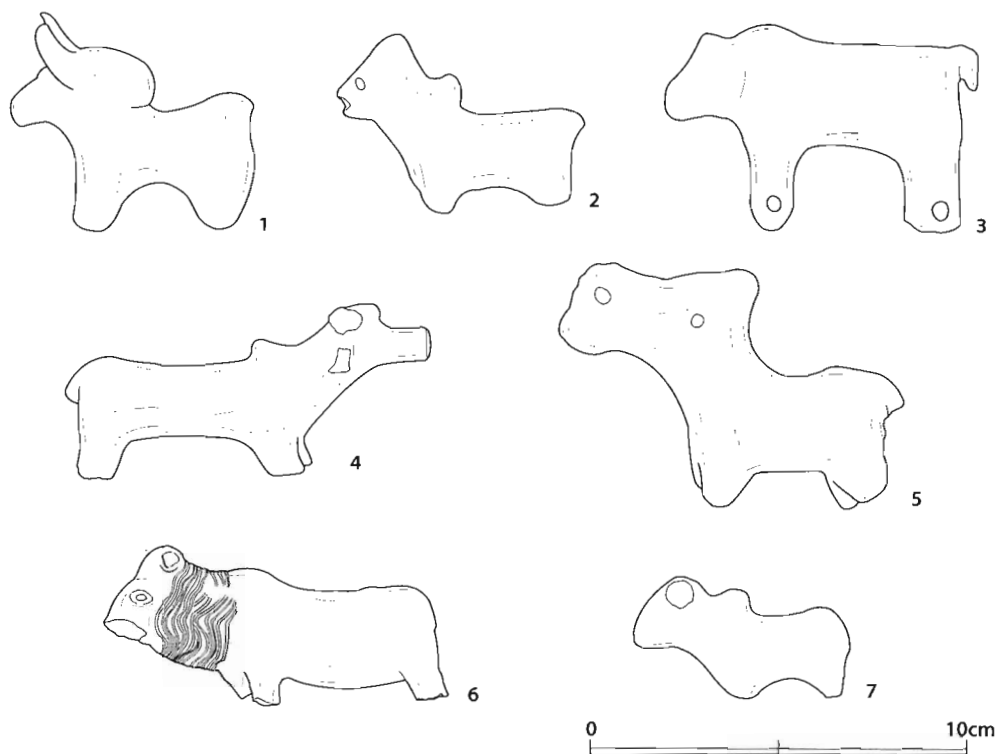


図20 グジャラート地方出土動物土偶 (S=1/2)

ジャープ東部にも広がっていた可能性を強く示唆している。

(9) グジャラート地方の遺跡

23 ロータル遺跡 (図20: 1~6)

ロータル (Lothal) 遺跡はグジャラート地方のキャンベイ湾湾奥部に位置する遺跡で、発掘調査によって城塞域と居住域を接続して一体的に配置する平面形態と船着場に推定される大規模煉瓦積遺構が検出されている (Rao 1979)。出土遺物にはインダス式印章のみならず、アラビア半島のペルシャ湾岸に由来するディルムン式印章も出土しており (Rao 1985)、西方との海洋交易の遺跡として評価されている。

報告書の記載によるとコブウシ 74 点、イヌ 34 点、サイおよびブタ、ウマ各 2 点、一角獣、ゾウ、トラ、ヒョウ、クマ、ヒツジ、リスが各 1 点出土しているという。出土点数

は示されていないものの、鳥も出土している。ただし、公表されている写真でみる限り、このうち動物の特定が確実と判断できるのはコブウシ、サイ、一角獣、ゾウ、トラ、ヒツジのみで、ほかは動物の種類を特定を可能にする細部表現に乏しいために想像の域を出ない。

興味深いのは四肢の側面に穿孔を施したもので、車輪形土製品を棒によって固定するためのものと考えられる。また、動物の上半身もしくは頭部と胴部を別につくって棒で合体させる例も 2 点が報告されている。

またウシに分類された 1 例は全体の造形および顔貌や体毛などの細部表現できわめて写実的である。角は別造りのものを頭部側面の孔に挿入するようになっている。これはモヘンジョダロ遺跡でも出土しているスイギュウの土偶に共通する特徴をもった例をということができるであろう。

24 スールコータダー遺跡 (図 20 : 7)

グジャラート地方北西部のカッチ地方東部に所在するスールコータダー (Surkotada) 遺跡では、城塞域と市街域を接続させて石積周壁で一體的に囲む平面形を有する遺跡である (Joshi 1990)。

6点の動物土偶が出土しており、うち1点がI B期、5点がI C期の出土である。いずれもコブウシ形土偶で、2点は角である。細部表現の乏しい簡素な土偶に加えて、中空の大形土偶の下半身部分も1点出土している。後肢には穿孔が施されており、軸棒を通して車輪を取り付ける構造になっていたことがわかる。

(10) バダフシャーン地方

25 ショールトゥガイ遺跡

アフガニスタン北部のバダフシャーン地方に所在するショールトゥガイ (Shortughai) 遺跡は、ハラッパー式彩文土器やインダス式印章が出土するなど、ラピスラズリの採取を目的とした遺跡と考えられる (Francfort 1989)。

この遺跡では1点のコブウシ形土偶が出土している。大きく後方に張り出すコブを有するほかは、細部表現はみられない。

(11) オリエント美術館所蔵動物土偶の帰属文化

以上の検討を踏まえて、オリエント美術館所蔵の動物土偶の帰属文化および帰属時期について考えてみよう。所蔵資料の細部表現で注目されるのは、丸く大きな眼の表現と彩文による装飾である。円形の輪郭線とその中心に加えらる点からなる眼の表現はきわめて特徴的であり、動物土偶の様式的特徴となっている。また、彩文も所蔵資料に共通する特徴で、かつ平行線を主体に構成する点でも強い一貫性をみることができる。

この特徴を上にもてきた各地の動物土偶と比較すると、バローチスターン地方南部の動

物土偶との共通点が見いだされる。クッリ遺跡では所蔵資料と同じ特徴を有するコブウシ形土偶が報告され、メーヒー遺跡でも同形と判断できる例が出土している。ナール遺跡ではIII期に類似資料を確認することができる。以上の類例を踏まえて、ここではバローチスターン南部系統の動物土偶として理解しておこう。

出土土器からみると、ナール遺跡III期は前3千年紀前半、クッリ遺跡およびメーヒー遺跡は前3千年紀前半から末に措置できる。動物土偶のもつ丸く大きな眼をクッリ式土器に描かれる動物の眼の表現に共通するものとみなすと、前3千年紀末に近い年代に限定することも可能であろう。

ナール遺跡をのぞくと、土偶と土器の出土層位の関係が判明する遺跡がなく即断することは難しいが、所蔵資料と同形もしくは共通する特徴をもった土偶は広く見積もって前3千年紀中葉から後葉に位置づけることができるであろう。土器と土偶の変化の契機および速度が必ずしも一致しない可能性も十分にあり、所蔵資料の動物土偶と既知の土器様式を一対一で対応させることができるかどうか、今後の研究課題となろう。

彩文を施した例はバローチスターン高原に広くみられるが、所蔵資料が属する様式はより彩文の多用性が強い。前3千年紀前半以前のバローチスターン地方南部の動物土偶の例が乏しいことから、この地域に特有の特徴であるのか、もしくは前3千年紀後半になって何らかの契機のもとに一般化したものであるのか不明である。バローチスターン高原中央部では数は少ないものの、前3千年紀前葉の彩文を施した動物土偶が知られており、その彩文パターンは所蔵資料に共通している (ダンブ・サダート遺跡III期、メヘルガル遺跡VII期)。

コブウシ形土偶はバローチスターン高原のみならず、西のイラン高原南東部、東のイン

ダス平原にも分布しており、所蔵資料が属する様式もコブウシを造形の対象とする文化的志向性の一端を構成しているが、彩文による細部表現が他地域のコブウシ形土偶と明確に異なっている点はこの土偶が属した社会・文化の強い一体性を示すものとして理解すべきであろう。どのような社会的背景のもとにこうした一貫性の強い動物土偶が出現したのか、またそれはバローチスターン地方南部の社会・文化のどういった側面を象徴しているのか今後の研究課題となるであろう。

ネコ科の動物を表現したと考えられる土偶については、土偶としては類例を確認できないが、クッリ式土器の彩文に同様の動物を描いた例があり、関連性を推定することができる。インダス平原以東においては、こうしたネコ科の動物の表現例は同じく土器に見いだされるのみであり、クッリ式土器に関する筆者らの検討(近藤ほか 2007)では、クッリ式土器の影響によるものと考えられる。したがって、このネコ科動物土偶はバローチスターン高原南部の独自の図像体系に帰属するものと判断してよいであろう。

鳥形土偶については各地で類例があり、コブウシと同様であるが、丸く大きな眼を接続させて描く点、中空につくって穿孔を施す点など、オリエント美術館所蔵資料の大形コブウシ形土偶に共通する点を有している。この点から判断して、コブウシ形土偶と同一の様式に属するものと判断できる。

このようにオリエント美術館所蔵資料はバローチスターン高原南部に前3千年紀前半から後半にかけて展開した動物土偶の系譜を汲むものであり、さらに踏み込めば、前3千年紀後葉の同地域に展開したクッリ文化に関係している可能性を指摘することができる。

(12) 先インダス文明期からインダス文明期における動物土偶の展開

本節では、所蔵資料が属する前3千年紀後

半のバローチスターン地方南部の土偶様式の位置づけをめぐる、上に概観した各地の動物土偶との関係について若干の考察を加えることにする(図21)。それは上述のバローチスターン南部動物土偶様式の成立過程を考える上でも一助となろう。

まず、バローチスターン高原についてみると、この地域では前5千年紀末もしくは前4千年紀前半までには各地で動物土偶がつくられてきた。コブウシ形が一般的であり、土偶としての造形対象におけるコブウシへの志向性を示している。この志向性はイラン高原南東部にも通じるところである。しかも注目されるのは、彩文や粘土貼付あるいは刺突、刻線等による細部表現をもたない簡素な造形が主流となっていることである。しかも、小形品が多いこともこの点に関連して注意される。

イラン高原南東部では前4千年紀後半にはコブウシ形土偶が製作されており、バローチスターン高原と連動している可能性が考えられる。ただし、コブウシ形土偶に対する志向性の形成が多発的なものであった可能性もあり、いずれかの地域からの一方的伝播とは即断はできないであろう。ただし、前4千年紀後半にはイラン南東部とバローチスターン高原全域とを結ぶ交流関係が強化されたことが彩文土器に窺われるところであり、その交流関係の中でコブウシ形土偶に対する志向性も広域的に共有されることになった可能性が高い。

ここで問題となるのは、動物をかたどった土偶がどのような目的でどのように使用されたのかという点である。Mackayによるモヘンジョダロ遺跡の動物土偶の報告以来(Marshall 1931)、動物土偶は幼児の玩具であるとする説が存在した。また、幼児による製作を指摘する見解もある(De Cardi 1970)。確かに簡素な造形を特徴とする一群は簡便な成形工程を意味しているが、それを






















	ハローチスターン	シンド	ハンジャープ西部	ガツガル	グジャラート
先文明期	南部	北東部			
初期ハラッパー文化段階	   <p>コブウシ・ヒツジ</p>	    	  	 	   <p>多様な動物</p>
文明期	 <p>コブウシ・ネコ科動物</p>	   <p>多様な動物</p>	 	<p>コブウシ</p>  	
後期	 				
中期					
前期					

図 21 各地における動物土偶の変遷 (S=1/4) (図作成の便宜上、左向きの実測図も右向きに統一した)

もって幼児による製作・使用を想定するのは早計であろう。製作される動物がコブウシに偏っているのは、コブウシに対する製作者もしくは使用者の親和性ないしは志向性を示すものであり、それが広範な地域に長期的に存在しているということは、コブウシを造形の対象として選択するという文化的志向性の伝統を物語っている。こうしたコブウシに対する文化的志向性はバローチスターン高原の彩文土器にも窺われるところであり、単なる偶発的・単発的な造形行為の積み重ねとして理解することは難しい。

コブウシが家畜動物として人々に近い関係にあったことは確かであり、その過程で選択的にコブウシが造形の対象として抽出されているのである。このことをもってコブウシが信仰の対象となっていたと即断することも同様の短絡的解釈の危険性を有しているが、そうしたコブウシに対する親和性と造形対象とする志向性が広範囲・長期間にわたって展開したことは動物土偶の変遷を考える上で重要である。信仰の対象とまではいかなくとも、文化的志向性の対象として、特別な立場ないしは意味を付与されていた可能性は高いであろう。

簡素な造形を特徴とする一群は、それがより高度な造形表現の対象ではなかったことを意味している。逆にいえば、簡素な造形によって表現することがコブウシに対する志向性と結びついていたともいえるであろう。使用の実態に迫ることを可能にするようなコブウシ形土偶の出土状況は知られておらず、想像することすら難しいが、極端に言えば祭壇のような施設に永続的な信仰対象として安置されるような使用状況ではなかった可能性が高いであろう。

それに対して、前3千年紀の後半にバローチスターン地方南部に展開したコブウシ形土偶は、その形態および細部表現における定形性からみて、簡素な造形を特徴とする一群と

は異なる意味をもつものであったと推測できる。大形の中空土偶の存在ともあわせて、コブウシ形土偶に対する明確な社会的意図もしくは文化的志向性を伴うものであった可能性が考えられる。

クッリ式土器にもみるように、前3千年紀後半のバローチスターン高原南部には、他地域にはみることのできないまでのコブウシに対する強い志向性が存在していたと推測される。その淵源は前3千年紀前葉のバローチスターン高原中央部に求められ、その伝統が前3千年紀後半にバローチスターン地方南部でクッリ式土器や動物土偶というかたちをとって顕在化したと理解することができる。

いまだ資料不足は否めないものの、先文明期終末の初期ハラッパー文化段階以降のバローチスターン高原における土器様式の変遷をもとにクッリ式土器の成立過程を検討すると、そこにはバローチスターン高原の文化伝統の系譜を見いだすことが可能であり（近藤ほか2007）、前3千年紀後半のバローチスターン高原にはその文化伝統を継承する人々が自らの社会・文化的アイデンティティを、コブウシを代表とする造形対象によって表現しようとしたことを窺うことができる。

前3千年紀中葉にはインダス平原に一つの求心力をもつ文明社会が成立し、バローチスターン高原もまた直接的・間接的にその影響下に置かれることとなったが、先文明期に育まれた文化伝統は途絶えることなく、前3千年紀後半になって再び顕在化することとなったのである（図22）。その代表的存在がクッリ文化であり、イラン高原南東部やアラビア半島方面との交渉関係を軸にバローチスターン高原南部に広く展開することとなったというのが筆者らの見解である（近藤ほか2007）。コブウシ形土偶もまたそうしたバローチスターン高原の文化伝統を継承するものであると同時に、広域に及ぶ地域間交流ネットワークに参画した人々の社会・文化的

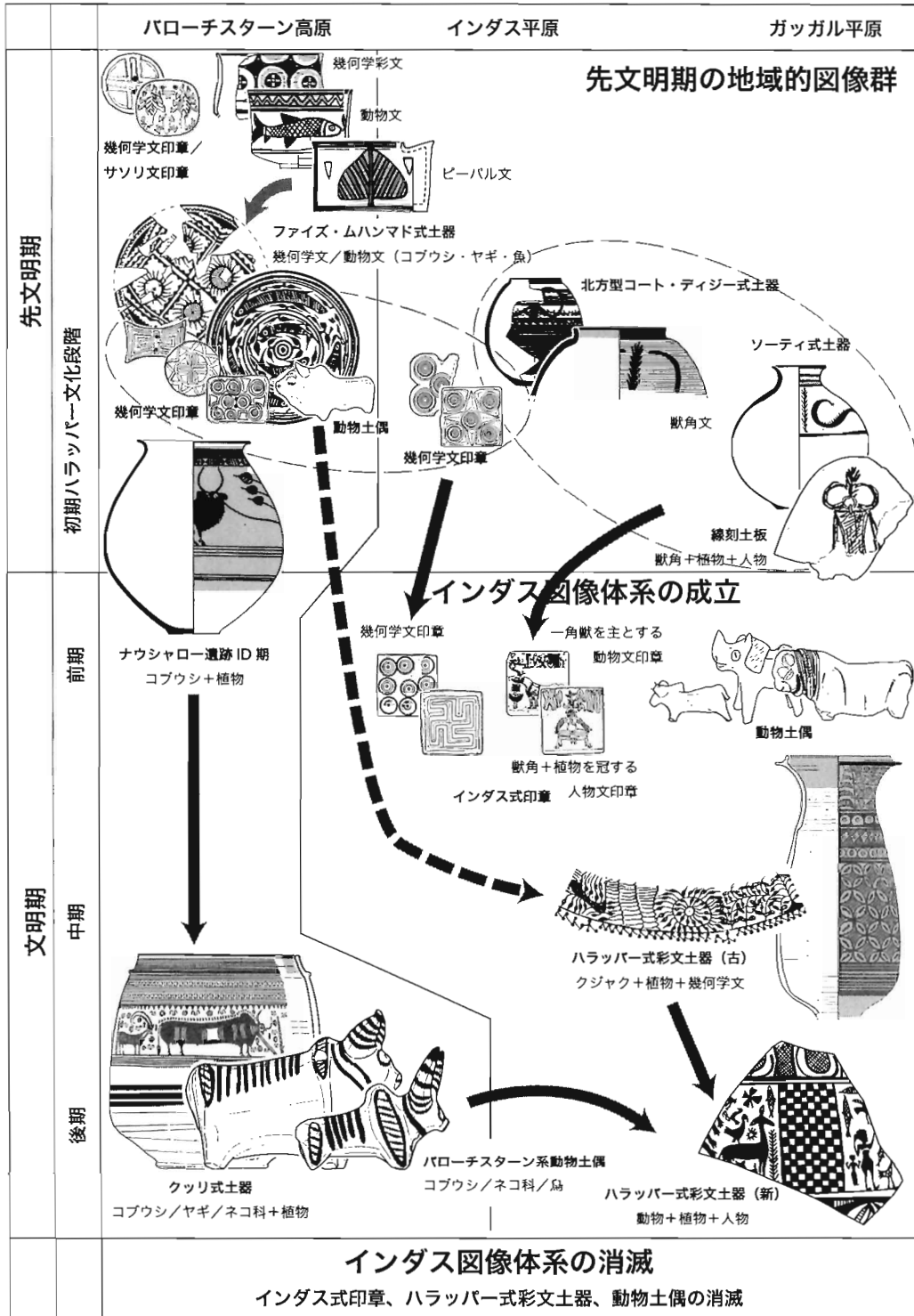


図 22 先インダス文明期からインダス文明期にいたる図像の変遷 (遺物の縮尺は不同。図作成の便宜上、本来の方向を変更して図示した動物土偶がある)

アイデンティティを表象するものではなかったであろうか。

一方、コブウシに対する親和性および造形の対象とする文化的志向性は、インダス平原にも広がっていたことが平原部各地の出土資料に知ることができる。しかし、現有資料による限り、コブウシ形土偶の初出は先文明期終末から文明期前期のことであり、それ以前に同様の文化的志向性が存在したのかどうか不明である。また、彩文土器においてもコブウシを描いた例は文明期以前にはなく、むしろスイギウウの角を誇張的に表現した彩文土器が存在するのみである。

さらに、平原部で成立したと考えられるハラッパー式彩文土器にはコブウシを彩文体系の中に組み込んだ例は今のところ知られていない。インダス式印章にはコブウシの表現例があるが、客体的な存在であり、平原部に中心を置くインダス文明社会においてはコブウシが意図的に排除されている可能性すら窺われる。

その中で各地に分布するコブウシ形土偶は特異であり、ハラッパー式彩文土器やインダス式印章がもつ図像体系には組み込まれていなかった可能性がある。文明期の平原部でもパローチスターン高原同様にコブウシが動物土偶としての造形対象の中心に位置していたことは、各地の遺跡でコブウシ形土偶が卓越する点にみることができる。コブウシ形土偶の造形が簡素であることもパローチスターン高原に通じる特徴である。このことはパローチスターン高原からの文化的影響によるものかどうか即断できないものの、コブウシに対する親和性が広範に浸透していたことは確かである。

文明社会における文化的志向性は空間軸および社会の階層的構造の点において重層化していた可能性が大であり、ハラッパー式彩文土器やインダス式印章がもつ社会・文化的意味や、それを取り巻いて布置される生産・流

通システムとは一度切り離して別の視点から動物土偶の展開を考察する必要性がある。

今ひとつ文明期の平原部における動物土偶の特質として指摘できるのは、コブウシだけではなく多様な動物が造形の対象となっていたことである。上に繰り返し指摘したように、細部表現の乏しい動物土偶においてはその種類を特定することすらきわめて難しい状況にあるが、確実に特定が可能なものとしてコブウシのほかに、一角獣、短角ウシ、サイ、ゾウ、ヒツジ、ウサギ、イヌなどがある。ただし、こうしたコブウシ以外の動物土偶の分布をみると、シンド地方およびパンジャーブ地方西部に限定され、そのほかではグジャラート地方のロータル遺跡に確認できる程度である。

興味深いことにこれらの動物はインダス式印章や銅板にも表現例が見いだされる。文明期の地域間関係の中で強い中心性をもつと推定されるシンド地方とパンジャーブ地方西部で多様な動物土偶が製作・使用され、その周辺部では一部を除いてコブウシに限定されるというのは、文明社会の中心地では印章と土偶で連動した図像体系の創出・更新が行なわれるのに対し、周縁部では印章と土偶が別個の社会・文化的意味をもった可能性を示唆している。これはあくまでも想像の域を出るものではなく、今後の資料の蓄積と集成を俟って詳細に検討する必要があるが、文明の中心地と周縁部での社会・文化の志向性ないしは仕組みの差異を示す可能性には注意を払う必要がある。

このようにパローチスターン高原とインダス平原における先文明期から文明期にかけての動物土偶の展開を概観すると、同じ粘土を素材として動物をかたどった動物土偶といえども、それぞれの地域の文化伝統やその時々地域社会が置かれた社会的環境によって、異なる社会・文化的意味を与えられていたことが推測できる。それは決して幼児の玩具といった位置づけではなく、動物土偶がきわめ

て社会・文化的存在であったことを示唆している。時空間軸上で動物土偶という分類上の塊を分解し、それぞれの意味を考察していくことが重要である。

そうした中で、前3千年紀後半のバローチスターン地方南部に展開したコブウシを中心とする定形性の高い一群は、この地域が当時置かれていた社会的環境の中で独自の文化的伝統を継承して成立した動物土偶様式であるといえるだろう。それは他地域に比して動物土偶が社会・文化的意味を伝える媒体としてこの地域の社会に重視されていたことを示すものである。

5 ポスト・インダス文明期以降の動物土偶の展開

最後にまとめて代えて、インダス文明期以降の動物土偶の展開について概観することにしよう（図23）。

インダス文明社会の衰退とは、都市の廃絶と文字の非使用化といった現象によって把握できるが、実質的には広範な地域を結びつけていた地域間交流ネットワークと社会的統合力の消滅と、それに続く新たなネットワークと地域社会の仕組みの形成である。こうした文明社会の衰退がそれを構成していた各地の地域社会にどのような影響を与えたのが文明社会の衰退過程にアプローチする一つの視点であるが、例えば動物土偶にはどのような変化がみられるであろうか。

上述のように、文明期にはコブウシを各地共通の造形対象とし、一部の地域では多様な動物をも表現するという社会・文化的行為が存在したが、前2千年紀になると、人物土偶も動物土偶も多く地域で姿を消すことになる。ピーラク遺跡のように前2千年紀を通して動物土偶がつけられたところもあるが、インダス平原から東のグジャラート地方、ガッガル平原では土偶に対する社会・文化的志向性と土偶をつくるという行為が途絶えて

しまったようである。

これが意味するところは何なのか。短角ウシやサイ、ゾウといったインダス式印章に連動する造形対象が文明社会の衰退とともに消えることは首肯できたとしても、コブウシ形土偶のように先文明期以来、長く続いてきた伝統といってもよいものが消えることは文明期とポスト文明期の間に社会・文化的断絶を窺わせている。文明社会の成立過程において先文明期の図像体系が再編される中で、コブウシ形土偶も新しく創出された文明期の図像体系の中に組み込まれてしまったのであろうか。ゆえに文明社会の衰退による既存の図像体系の崩壊とともに姿を消すことになったのであろうか。

他に同様の類例が知られないことから評価が難しいが、ピーラク遺跡ではラクダやウマといった新たな造形対象が登場している。土器は大きくみればバローチスターン高原の幾何学彩文土器伝統に属しているが、文明期のバローチスターン高原の土器様式とは大きく異なっている。動物土偶もまた文明期に系譜をたどることができない造形を特徴としており、インダス文明とは関わりのなかった社会・文化的集団の存在を窺わせている。

前2千年紀になると、東のガッガル平原やグジャラート地方に地域社会の中心が移動し、地域間交流ネットワークもまた東方へと広がっていくことになるが、前2千年紀を通してこれらの地域で動物土偶がつけられることはなかった。バグワーンプラ遺跡出土のスイギュウ形土偶がポスト文明期のバーラー文化に属する可能性はあるが、一方で彩文灰色土器文化期（前1400年頃～前300年頃）に属するアラムギールブル遺跡Ⅱ期にも同形のスイギュウ形土偶が出土しており、彩文灰色土器文化の所産である可能性もある。ただし、時空間軸上で広く分布するわけではなく、動物土偶の造形行為の一般化した様子を認めることはできない。

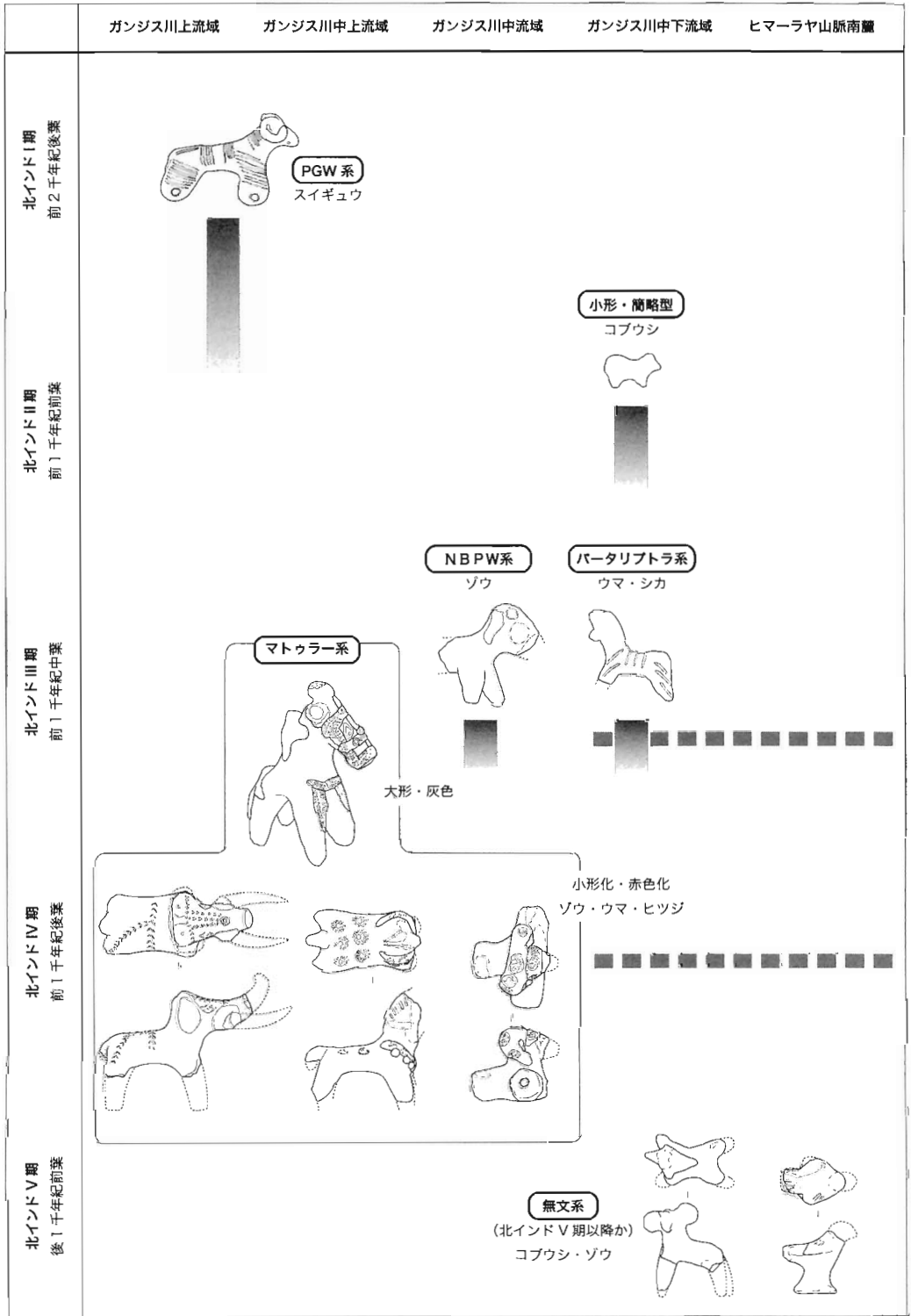


図 23 北インドにおける初期歴史時代の動物土偶の変遷 (土偶は S=1/6)

動物土偶が再び一般化するのには前1千年紀前葉のことである(上杉2001)。この時期にはガンガー平原の遺跡で動物土偶が出土するようになる。そこで現れるのは小形で簡素なつくりを特徴とするコブウシ形土偶で、かつての伝統が復活したかのようでもある。もちろん簡素なつくりを特徴とする造形は特定の時代・地域を越えて出現する可能性がある。短絡的に系譜関係を想定することはできないが、興味深いのはコブウシがそうした簡素な造形の対象となる傾向が存在することである。コブウシに対する親和性がそれを引き起こすのであろうか。

続く前1千年紀中葉になると、ゾウやウマ、シカといったコブウシ以外の土偶が散見されるようになり、前1千年紀後葉には粘土貼付+スタンプ文による細部表現を特徴とするゾウ・ウマ・ヒツジ形土偶が北インドに広範囲に分布するようになる。この様式の動物土偶はマトウラー周辺の起源地とするもので、それが北インド各地に広がった(上杉2001, 2003)。興味深いのはこの様式の中にコブウシが存在しないことで、明らかにコブウシを造形対象から排除する意図が製作者・使用者に看取れる。後1千年紀前葉には、前代の様式が途絶えて細部表現の乏しい造形を特徴とする様式へと転換する。ここで表現の対象となったのはコブウシであった。

ここでは深く踏み込まないが、明らかに造形対象としての特定の動物の選択的抽出とその造形的特徴が時代と地域によって変化していることは、南アジアにおける動物土偶の変遷を考える上で重要である。決して素朴な造形ではない。なぜ時代と地域によって動物土偶の様式(動物の種類も含めて)が変化するのか、それぞれの社会・文化の中で動物土偶がどのような意味と役割を与えられていたのか、個別的に検討を進めていくことが求められる。それを当時・各地の社会・文化の様態を関連づけることができたとき、相対的にせ

よ動物土偶がもつ社会・文化的意味に近づくことが可能になるであろう。

本稿を作成するにあたって、岡山市立オリエント美術館館長谷一尚氏、同美術館主任学芸員須藤寛史氏および同・四角隆二氏に資料調査にご高配をいただきました。また、小茄子川歩氏には貴重な助言を頂戴しました。ご芳名を銘記して御礼申し上げます。

引用・参考文献

- Alcock, L. 1986 A Pottery Sequence from Mohenjo Daro: R. E. M. Wheeler's 1950 "Citadel Mound" Excavations. In *Excavations at Mohenjo Daro, Pakistan: The Pottery*, pp.493-570. Pennsylvania: The University Museum, University of Pennsylvania.
- Ali, I. and G. R. Khan 2001 Jhandi Babar I: A Neolithic Site in the Gomal Plain, Pakistan. *Ancient Pakistan* 14: 174-217.
- Ali, T. 1994-95 Excavations in the Gomal Valley: Rehman Dheri Report No.2. *Ancient Pakistan* 10: 1-233.
- Ardeleanu-Jansen, A. 2002 The Terracotta Figurines from Mohenjo Daro: Considerations on Tradition, Craft and Ideology in the Harappan Civilization (c.2400-1800 BC). In *Indian Archaeology in Retrospect vol.II: Protohistory*, pp.205-222. Delhi: Manohar.
- Besenal, R., V. Marcon, C. Buquet and B. Mutin 2005 Shahi-Tump: Results of the Last Field-Seasons (2001-2003). In *South Asian Archaeology 2003*, pp.49-56. Aachen: Linden Soft Verlag e.K.
- Casal, J.-M. 1961 *Fouilles de Mundigak*. Paris: Librairie C. Klincksieck.
- Dales, G. F. 1965 New Investigations at Mohenjodaro. *Archaeology* 18(2): 145-150.
- De Cardi, B. 1970 *Excavations at Bampur: a Third Millennium Settlement in Persian Baluchistan, 1966*. Anthropological Papers of the American Museum of Natural History 51(3). New York: American Museum of Natural History.
- Durrani, F. A. 1988 Excavations in the Gomal Valley, Rehman Dheri Excavation Report No.1. *Ancient Pakistan* 6: 1-232.
- Durrani, F. A, I. Ali and G. Erdosy 1991 Further Excavation at Rehman Dheri. *Ancient Pakistan* 7: 61-151.
- Fairservis, W. A. Jr. 1956 *Excavations in the Quetta*

- Valley, West Pakistan. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 45(2). New York: The American Museum of Natural History.
- Fairservis, W. A. Jr. 1959 *Archaeological Surveys in the Zhob and Loralai Districts, West Pakistan*. Anthropological Papers of the American Museum of Natural History 47(2). New York: The American Museum of Natural History.
- Francfort, H.-P. 1989 *Fouilles de Shortughai: Recherches sur L'Asie Central Protohistorique*. Paris: Diffusion de Boccard.
- Franke-Vogt, U. 2005a Sohr Damb/Nal, Baluchistan, Pakistan: Ergebnisse der Grabungen 2001, 2002 and 2004. *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 35-36: 83-141.
- Franke-Vogt, U. 2005b Excavations at Sohr Damb/Nal: Results of the 2002 and 2004 Seasons. In *South Asian Archaeology 2003*, pp.63-76. Aachen: Linden Soft.
- Jarrige, C., J.-F. Jarrige, R. Meadow and G. Quivron (eds.) 1995 *Mehrgarh: Field Reports 1974-1985 from Neolithic Times to the Indus Civilization*. Karachi: The Department of Culture and Tourism of Sindh and Department of Archaeology and Museums, French Ministry of Foreign Affairs.
- Jarrige, J.-F., M. Santoni and J.-F. Enault 1979 *Fouilles de Pirak*. Paris: Diffusion de Boccard.
- Joshi, J. P. 1990 *Excavation at Surkotada 1971-72 and Exploration in Kutch*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.87. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Kenoyer, J. M. 1991 Urban Process in the Indus Tradition: A Preliminary Model from Harappa. In *Harappa Excavations 1986-90: A Multidisciplinary Approach to Third Millennium Urbanism*, pp.29-60. Madison: Prehistory Press.
- Khan, F., J. R. Knox and K. D. Thomas 2000 Jhandi Babar, A New Site in the Gomal Plain, and the Sheri Khan Tarakai Culture Complex. *Journal of Asian Civilizations* 23(2): 25-50.
- Lal, B. B., B. K. Thapar, J. P. Joshi and M. Bala 2003 *Excavations at Kalibangan: The Early Harappan (1960-69)*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.98. New Delhi: Archaeological Survey of India.
- Mackay, E. J. H. 1938 *Further Excavations at Mohenjo-daro*. Delhi: Government of India.
- Mackay, E.J.H. 1943 *Chanhu-daro Excavations 1935-36*. New Haven: American Oriental Society.
- Manmohan Kumar, V. Shinde, A. Uesugi, V. Dangi, Sajjan Kumar and Vijay Kumar 2009 Excavations at Madina, District Rohtak, Haryana 2007-08: A Report. In *Occasional Paper 7: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, pp.77-177. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.
- Marshall, J. 1931 *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. London: Arthur Probsthain.
- Meadow, R. H. ed. 1991 *Harappa Excavations 1986-90: A Multidisciplinary Approach to Third Millennium Urbanism*. Madison: Prehistory Press.
- Possehl, G. L. 1986 *Kulli: An Exploration of Ancient Civilization in Asia*. Durham: Carolina Academic Press.
- Rao, L. S., Nandini B. Sahu, Prabhaskar Sahu, U. A. Shastri and Samir Diwan 2004 Unearthing Harappan settlement at Bhirrana (2003-04). *Purātattva* 34: 20-24.
- Rao, L. S., Nandini B. Sahu, Samir Diwan, Prabhaskar Sahu and U.A. Shastri 2005 New Light on the Excavation of Harappan Settlement at Bhirrana. *Purātattva* 35: 60-68.
- Rao, L. S., Nandini B. Sahu, U. A. Shastri, Prabhaskar Sahu and Samir Diwan 2006 Bhirrana Excavation: 2005-06. *Purātattva* 36: 45-49.
- Rao, S. R. 1979/1985 *Lothal: A Harappan Port Town (1955-62), vols.I and II*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.78. New Delhi: Archaeological Survey of India.
- Salvatori, S. and M. Vidale 1997 *Shahr-i Sokhta 1975-1978: Central Quarters Excavations, Preliminary Report*. Rome: ISIAO.
- Sant, Urmila, T. J. Baidya, N. G. Nikoshey, N. K. Sinha, S. Nayan, J. K. Tiwari and A. Arif 2005 Baror: A New Harappan Site in Ghaggar Valley: A Preliminary Report. *Purātattva* 35: 50-59.
- Shinde, V., T. Osada, A. Uesugi and Manmohan Kumar 2008 A Report on Excavations at Farmana 2007-08. In *Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past*, pp.1-116. Kyoto: Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.
- Stein, A. 1929 *An Archaeological Tour in Waziristân and Northern Baluchistân*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.37. Calcutta: Government of India Central Publication Branch.
- Stein, A. 1931 *An Archaeological Tour in Gedrosia*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no. 43. Calcutta: Government of India Central Publication Branch.
- Tosi, M. 1983 *Prehistoric Sistan 1*. Rome, IsMEO.
- Vats, M. S. 1940 *Excavations at Harappa*. Delhi: Government of India Press.
- Wheeler, R. E. M. 1947 Harappa 1946: The Defences and Cemetery R37. *Ancient India* 3:

58-130.

- 上杉彰紀 2001 「北インドにおける動物土偶—その変遷と意義—」『関西大学博物館紀要』7: 17-42。
- 上杉彰紀 2003 「考古学から見た北インドにおける都市化の諸相」『古代王権の誕生Ⅱ 東南アジア・南アジア・アフリカ大陸編』95-115頁 角川書店。
- 上杉彰紀 2008 「パローチスターン高原における人物土偶に関する覚書—岡山市立オリエント美術館の資料紹介を兼ねて—」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』22: 1-28。
- 上杉彰紀 2008 「インダス文明社会の成立と展開—地域間交流の視点から—」『古代文化』60-2: 111-120。
- 上杉彰紀 2008 「インダス・プロジェクトによるインダス遺跡の発掘調査」『環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書』83-114頁 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト。
- 上杉彰紀 2009 「ガッガル平原における先・原史文化の変遷」『環境変化とインダス文明 2008年度成果報告書』75-102頁 総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト。
- 上杉彰紀・小茄子川歩 2008 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察—彩文土器の編年を手掛りとして—」『西アジア考古学』9: 101-118。
- 近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩 2007 「クッリ式土器とその意義—岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて—」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』21: 15-50。

図の出典

- 図1～図8：筆者実測・作成。
 図9：図1～8をもとに筆者作成。
 図10：筆者作成。
 図11：Tosi ed. 1983、Salvatori and Vidale 1997、Casal 1961、De Cardi 1970の掲載実測図・写真より作成。
 図12：Stein 1931、Franke-Vogt 2005bの掲載実測図・写真より作成。
 図13：Jarrige, C. *et al.* 1995の掲載実測図・写真より作成。
 図14：Fairservis 1956、Fairservis 1959、Ali and Khan 2001、Durrani *et al.* 1991の掲載実測図・写真より作成。
 図15：Jarrige *et al.* 1979の掲載実測図より作成。
 図16：Marshall 1931、Mackay 1938の掲載写真をもとに作成。
 図17：Mackay 1943の掲載写真より作成。
 図18：NHK・NHKプロモーション2000の掲載写真より作成。
 図19：Sant *et al.* 2005、Lal *et al.* 2003、Shinde *et al.* 2008の掲載実測図・写真より作成。
 図20：Rao 1985の掲載写真より作成。
 図21：筆者作成。
 図22：筆者作成。
 図23：上杉2001の掲載図より筆者作成。
 表1：筆者作成。